

---

**目指す地位は縁の下。**

ビス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

目指す地位は縁の下。

### 【Nコード】

N6841Y

### 【作者名】

ビス

### 【あらすじ】

異世界に飛ばされた女子高生、相馬沙羅は、彼女そっくりな貴族の令嬢の身代わりとして後宮入りする事に。

彼女の目下の悩み事は、後宮から逃げる事でも、後宮の一番になる事でも、日本に帰る事でも無く、大好きな皇帝陛下を、どうしたら幸せに出来るか？だった。

美人な奥様方が仲良しだったら、彼もきつと嬉しい筈！と、自分磨きそっこのけで、側室達の間を取り持つ事に奔走する健気な天然少女の話。

## 登場人物（ 随時更新 ）

若干のネタバレもあります。ご注意ください。

### 【相馬沙羅<sup>ソウマサラ</sup>】

（サラサ・トウマ）

本作品の主人公。

異世界に飛ばされ、自分に良く似た少女　サラサ・トウマの身代わりとして後宮入りする。皇帝に恋する一途な少女。天然だが気が強い一面も。

### 【皇帝陛下】

鴻国<sup>コウコク</sup>を統べる皇帝。黒目黒髪之美形。

武に秀でており、皇太子時代は軍の大將として戦を勝利へと導き、軍神と崇められていた。

名前はまだ無い…（笑）

### 【カナナ】

サラサ付きの侍女。

緩やかに波打つ栗色の髪の可愛らしい少女。穏やかで気配り上手。実はかなり有能…？

【シャロン・ロッド・ダリア】

側室。レダ王国の第三王女。

プラチナブロンドに碧眼の大人しやかな美少女。

【アヤネ・サイリ】

側室。礼部侍郎（教育・祭祀を司る機関の幹部）の息女。  
長い黒髪を後ろで纏めた知的美人。黒目。

【セツナ・イノリ】

近衛軍大将。皇帝の乳兄弟にして幼なじみ。  
冷静沈着。無表情が標準仕様。銀の髪と瞳を持つ。

【イオリ・ユウキ】

サラサ付きとなった護衛武官。プラチナブロンドに翠緑の瞳の貴公子……に見える女性。  
剣の腕も女性の扱いも、男性顔負け。

【ルリカ・エイリ】

側室。吏部尚書（官吏の人事を司る機関の長官）の息女。

気が強くプライドの高い美少女。

【ホノカ】

側室。安璃州アリシユウの州牧（州の統治者）の補佐官の息女。  
穏やかな癒し系。

## プロローグ

私は今、とても悩んでいます。

あ、申し遅れました。私の名は相馬<sup>ソウマ</sup> 沙羅<sup>サラ</sup>。一介の女子高生トリックパーです。

若干妖しい語感な気がするのは、気のせいです。

軽く言っではいますが、異世界に飛ばされた当初は、本当に驚きました。

友達と夏休みに遊園地へ行つて、逆バンジーにチャレンジ。怖くてぎゅゅつと瞑っていた目を開けたら薄暗い路地裏にいた。ありえん。

普通…いや、異世界トリックに普通の定義があるかは知らないが、セオリーとしては落ちるモンなんじゃないの。  
飛んだら異世界ってどんな新境地だ。

そして私が消えた後のバンジーのゴムの行方が気になる。昔懐かし  
のコントの様に誰か、ばっちゃんされてないといいけど。

とにかく、不本意ながらトリックしてしまった私は、当然の事ながら訳が分からなかった。まずは自分の頭を疑った。

でも夢や幻にしては、色んな事がリアルで。

薄汚れた壁に貼られた、色褪せたポスターに書かれた、不可思議な文字。

湿った土の上に、無造作に置かれた樽の影から這い出す、見たこともない形の虫。

夏休みだった筈なのに、肌をさす様な冷気と、嗅いだ事の無い、すえた様な臭い。

五感が私に訴えた。

此処は私が生きていた場所では無い、と。

混乱し、恐慌した私は、その場から一步も動けずに、震えていた。寒さと、恐怖に。

で、気付いたら攫われてた。

あ。この辺前振りなんで、色々サクサク進みます。

その時の私の恐怖や憤りは、取り敢えず今は置いておきましょう。

攫われた私の行き先は、奴隷市場か娼館だろうと予想していました。お先真つ暗です。

見ず知らずの狸親父に好き放題される位なら…と蒼白になりながら

覚悟を決めたのですが、私のついた場所は、どちらでもありませんでした。

其処は豪華なお屋敷で、どうやら貴族のお宅の様です。

でもまだ狸親父に売り払われる可能性が消えた訳じゃない、と警戒する私の前に現れたのは、壮年の男性とその妻らしき女性でした。

因みにダンディーなおじさまでした。奥様は清楚な美人。

妻公認で人身売買とか流石に無いと思うのでセーフ。と私は漸く安堵しました。

安堵したのも束の間、夫婦に抱き締められた。何のプレイだ。

離して下さいとパニくる私に、二人は驚いた顔になり恐る恐る『サラサ』じゃないの？と訊ねた。惜しい、『さ』がいつこ多い。

彼らは驚き、そして悩んだ後、私にお願いがある、と言った。

そのお願いとやらをザックリ纏めると、彼らはどうやら私に、娘の身代わりになって欲しいらしい。

数日後に嫁入りを控えた彼らの娘が、今日突然いなくなったそうだが、結婚が嫌で家出とか黄金パターンだよな、と大層不謹慎な事を考えてしまったが、娘は割と乗り気だったらしい。

急に雲隠れしてしまった娘に、彼らは蒼白。

嫁ぎ先は彼らより身分が上。今更此方側から撤回なんて出来ない。

何とかして娘を捜し出そうとした所、娘そっくりの私を発見。勘違いで攫ってきてしまったと。

…あれ。何かそれ違う黄金パターンな気がする。

娘今ごろ逆バンジーされてませんか？私の代わりに富士山見ながら空舞ってませんか？？

そうになると、娘さんを捜し出すのは不可能に近い気がするし、私も娼館行きは遠慮したいので、身代わりで嫁入りを決意しました。

この世界で頼る人もいませんし、どうやったら元の世界に帰れるかなんて全く分からないし、取り敢えずやるだけやってみましょう。

ところで貴族の奥さんってなにすりゃいいの。  
と、早速躓きましたが、正確には貴族の奥さんじゃありませんでした。

嫁ぎ先は、

なんと王様。

……色々あり得無とすぢぢせしませんか。

## 側室（仮）の悩み。

「…どうかなさいましたか？サラサ様。」

窓辺に置かれた椅子に腰掛け、ぼんやりと空を見上げていると、気遣わしげな声がかけられた。

緩やかに波打つ栗色の髪、長い睫毛に縁取られたつぶらな瞳。ビスクドールの様な美少女は、心配そうに私を見つめている。

「大丈夫よ、カナナ。心配してくれてありがとう。」

カナナは、『サラサ』の実家からついてきてくれたメイドさんだ。此方の世界の常識を知らない私をフォローする為、父母（仮）がつけてくれた娘なので、私が相馬沙羅である事も知っている。

本当のお嬢様では無い私を、気遣い過ぎる位気遣ってくれるカナナを心配させたくなくて無理矢理笑顔をつくるが、カナナは余計心配そうな顔になった。

それでもカナナは、それ以上突っ込む事はしない。さりげない形で私を慰めてくれる。

「…珍しい茶葉が手に入ったのですが、気分転換にいかがですか？」

「わあ、楽しみ！カンナのいれてくれるお茶、凄く美味しいから。」

「光荣ですね。では早速ご用意致します。」

ウフフ、と少し照れた様な微笑を浮かべたカンナが部屋を出て行くのを見送り、私はフウ、とため息をついた。

…ダメだなあ。カンナに心配かけちゃうなんて。

でも冒頭で記した様に、此処最近私はずっと悩んでいるのだ。

ちなみに結婚する事に対しての悩みじゃない。  
てゆうか、もうとっくに結婚したし。

此処、後宮ですから。

私はこの国…コウコク鴻国の皇帝陛下の…えつと何番目だったかな……確か  
15？番目くらいの側室となりました。

数日でこの世界の色々な事や、貴族の子女としての礼儀作法その他

諸々を詰め込まれ、半ば朦朧としている内に、気が付いたら此処にいた。どんだけショートしてたんだ自分。

…で、肝心の旦那様ですが……びっくりする位、格好良い人でした。

黒髪黒目のワイルド系で、私の好みど真ん中！！神様ありがとう！！

ですが格好良すぎて直視出来ません！！

アイドルだって、遠くから眺めてキヤイキヤイ騒いでるのが楽しいんです。間近で旦那を見て鼻血出しそうになる妻とか、無いだろ…。

しかも旦那様は、凄く優しい方でした。

詰め込み学習のせいで、ろくに働かない頭のまま後宮入りして、その日の夜が初夜とか…流石にキツかった。

泣きそうになりながらも、拒否なんて許され無い事は分かっていたから、蒼白な顔のまま、私はずっと俯いていた。

夜に後宮に渡ってきた皇帝をお迎えし、さあ覚悟を決める私、と腹を括ったところ、皇帝は私を見て苦笑した。

ちんけな小娘を馬鹿にする笑いでは無く、困ったような微笑み。

寝台に腰掛け、近くのテーブルに用意してあった酒瓶とグラスを手に取った皇帝は、固まった私を手招きし、自分の隣をポンポン叩き座れと示した。

酌を頼む、と酒瓶を渡され、私は慌ててグラスにお酒を注いだ。

皇帝はガラスの器を目で楽しむ様に数回揺らす。

薄暗い灯りの中でも美しい玻璃は、色鮮やかで、昔旅行先で見つけた薩摩切子を思い出した。

私がぼんやり見ている先、鼻先で香りを確かめた皇帝がお酒に口を付けようとしたところで、私は我に返る。

慌てて皇帝を止めた。

今思えば不敬過ぎるが、あるシーンが思い浮かんだのだ。

後宮とか皇帝とか遠い世界過ぎるけど、小説の中ではよく聞く『毒味』。

……毒味とか、正直怖い。でも、目の前にいる人は、私なんかと違って、替えのきかないたった一人のひと。

震える声で『私が先に』と申し出ようとしたが、皇帝は、優しい笑みで私の髪を撫で、そのまま酒を呷った。

いわく、毒には耐性があるから大抵のものは、彼にはきかないそう  
だ。

後、色やにおい、ついでにカンで分かるらしい。

…カンで。

脱力した私は、だいぶ緊張もほぐれ、その後朝まで皇帝とお話していた。

…アハンな事は一切ありませんでした。

初訪問は、そういう事はしないのかな？と思っていたが、どうやら蒼白だった私を哀れに思った皇帝が見逃してくれた様です。

彼は朝帰る前に、自分の指に傷をつけ、寝台に血痕を残していったから。

お役目を果たせなかつたと、私が責められないように。軽んじられないように。

…ジャスト好きな男性に、そんな優しい扱い受けて、惚れない女の子なんている？

私はまんまと惚れましたよ。

まさかの異世界で、旦那様に片想い中です。

…でも、旦那様には既に10人以上の美しい奥様がいます。

咲き誇る薔薇の様な彼女らに比べたら、私は野草…いや雑草。

恋の成就是早々に諦めました。

でも、あの方の為に何かしたい。

私はずっと、皇帝の為に何ができるかを悩んでいるのです。

## 02 (前書き)

お気に入り登録して下さい  
m 方々、ありがとうございます  
m (

凄く励みになります！

数日悩んで、カンナを心配させていた私ですが、気分転換にと庭へと散歩に出た日、ある事に気付いたので。

東屋から、咲き誇る花々を眺めのんびりと過ごしていた私は、視界の端に回廊を歩く貴妃の姿をとらえました。

数人の侍女をつれ、回廊を進んでいるのは、楚々とした美少女。お名前は確か…シャロン様、とおっしゃったか。

鴻国の藩属国の第三王女…そう、真正正銘のお姫さまなのだ。

初めてお会いした時はあまりの可憐さに、大人しやかな美少女！！リアルプリンセス！！とひそかに興奮していたりした。

(…ん？)

ゆったりと回廊を歩いていたシャロン様は、何かに気付いた様に顔を強張らせ、足を止めた。

彼女の視線を辿り、前方に目を向けると、違う貴妃が歩いてくるの

が見える。

沢山の侍女の先頭を、堂々とした様で歩くのは、華やかでキツめの美女。

鴻国の有力貴族の令嬢…アズミ様。

彼女は、シャロン様に気付いたようだが、全く歩調を緩めずに歩く。逆にシャロン様は、廊下の端へと寄ってしまった。…完全に負ける。

怯える様に俯くシャロン様を、アズミ様は一瞥し、馬鹿にする様に鼻を鳴らす。

…いくら王女様といえど、藩属国の小さな国の第三王女。しかも彼女自身、とてもか弱く大人しい方なので、余計に侮られてしまう。

アズミ様が去った後、シャロン様はお付きの侍女の制止を振り切り、泣きながら駆けて行った。

…たぶん擦れ違った時に、なにか言われたんだろっな。15くらい  
の少女が、あんな百戦錬磨っぽいお姉さんには勝てないよね。可哀  
想に。

…見ての通り、後宮の貴妃同士はとても仲が悪い。

まあ後宮とは、皇帝の寵を得る為に競い合う女の戦場だから、当り前といえは当り前なんだけど。

でもさ、折角こんなに美姫が集まっているのに、喧嘩ばかりじゃ、皇帝陛下だって癒されないんじゃないかな。

自分の奥さん達が、仲良しでニコニコしてくれた方が、絶対嬉しいよね！

私は知らず知らずの内に、テーブルの上で手のひらを握り締めていた。

ずっと、後ろに控えていてくれたカンナが、気遣わしげに声をかける。

「……サラサ様？」

「…カンナ。」

「はい？」

振り返った私の顔を見て、カンナは目を睜った。

今まで意気消沈していたのが嘘の様に、ニッコリと笑う私に、カナは瞠っていた目を笑みの形に細める。

「私、決めた！」

「はい。」

何を決めたのかも言っていないのに、カナは穏やかに笑んだ。

お元気になられた様で、ようございました。と私が元気になった事のみを喜ぶ。

会話のキャッチボールが成り立っていない気もするが、良い侍女に恵まれたなあ、私。

「カナナ、私ね…縁の下の力持ちになるわ！」  
大好きな皇帝陛下の為に、何か出来ないかとずっと悩んでいた。

美しい貴妃達のように、彼の目を楽しませる事も出来ず、  
教養ある貴妃達のように、彼の興味のある話も出来ない。

詩歌や楽器など、雅やかな趣味も無く、私は彼の為に何も出来る事が無いと落ち込んでいたけれど…

彼が後宮に来た時に、癒される様、煩わせる事が無い様に、

私は、お姫様達を仲直りさせよう。

彼女達には色んな目的や責務があるから、それは簡単な事じゃない  
だろうけれど、

それでも、少しでも歩み寄れる様に、私が頑張ろう。

彼女達が、憂い無く咲き誇れる様。

彼女達が、皇帝陛下を満たし癒せる様に、

私には、私にしか出来ない事がある筈。きっと。

## 皇帝陛下の癒し。

最近、小さな可愛らしい猫を手に入れた。

「…本日もお渡しとは…珍しい。」

執務を終え、食事や湯浴みを済ませたオレが、後宮へ行くと告げると、護衛の武官である幼なじみは何とも言えない表情を浮かべ、そう呟いた。

時刻は疾うに深夜をまわっている。皆寝静まっている中、まるで忍び込む様に後宮へ入るオレを見て、その表情は益々うるんなモノへと変わった。

「…後宮の主人である方が、何故盗人の様に隠れる必要があるのです。」

嘆かわしい、と肩を落とす幼なじみに、オレは苦笑を洩らした。

「他の妃に見つかっては、虐められかねんからな。」

軽く言つてはみたが、実際オレが一人の所に通っている事がバレたら、『虐め』なんて可愛らしいものでは済むまい。

下手したら、命の危険すらある。

「オレが多少情けない思いをする程度で、アレの平和が護れるなら安いものだ。」

「……………」

オレが笑つてそう断言すると、幼なじみは暫く沈黙していたが、やがて諦めた様に嘆息した。

言つても無駄だという事が、長年の付き合いで分かるのだろう。

無言でついてくる幼なじみと共に、オレは後宮の一室を目指した。

「…では陛下。私は此处でお待ち致します。」

「ああ。」

部屋につくと、幼なじみと別れ、彼女の寝室を目指す。

寝室に続く扉の隙間からは、ボンヤリとした薄灯りが洩れていた。

ゆっくりと戸を開けると、寝台から半身を起こし、書物を読む横顔が見える。

いつだったか、書物を読むのが苦手だと言った彼女に、オレが贈ったものだ。

幼子の好むお伽噺なのだが、贈った後に、嫌味にとられはしないかと後悔したのだが、彼女は何とも嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、礼を言ってくれた。

…あんなに真つ直ぐで、愛らしい存在を、オレは他に知らない。

貴族の女は、自分の短所を殊更隠そうとするものだ。

貴族では無い女も、喜ぶのは高価な贈り物だけだ。

サラサは、己の短所を認め、改善させようとする、素直さと勤勉さがある。

高価でも無い、しかも配慮に欠けた贈り物を、喜んでくれる。世界に一つの宝石を贈られた様に、心からの笑顔をくれる。

側室としては少々風変わりとは言えるが、そんなところが良いと思う。

サラサの傍は、酷く居心地が良い。

「…サラサ。」

「！」

静かな声で呼ぶと、彼女は弾かれた様に顔を上げる。

直ぐに入り口に立つオレを見つけ、パアツと表情を輝かせた。

「陛下！」

寝台からおり、パタパタと此方へ向かって来た彼女は、嬉しそうに顔を綻ばせてオレを見つめる。

「おかえりなさいませ。」

「…ただいま。」

後宮では、使う事の無い挨拶。

でも彼女に言われると、凄く安心する。

ほっと、漸く息がつける心地がするんだ。

テーブルに用意してあった酒瓶を引き寄せようとする彼女を制し、オレは寝台へと滑り込む。何時もの様に、隣を空けてポンポンと合図を送ると、彼女は目に見えて赤くなつた。

純粹無垢な様子に、暖かな気持ちが入み上げた。

「何もしない。眠るだけだ。夜が明ける前には帰るから……おいで。」

甘やかす笑みを浮かべ、手招きすれば、彼女は暫く悩んだ後、おずおずとやってきた。

真っ直ぐな黒髪をゆるりと撫でると、吊り上がり気味の漆黒の瞳が、オレを見上げる。

まるで臆病な子猫を懐かせようとしている気分だ。

抱き込んだ彼女の細い体は、甘く優しい香りがして、

気が付けばオレは、今までに無い位、深い眠りに落ちていた。

…サラサの香りには、癒しと睡眠導入の効果があるに違いない。

## 側室（仮）の願い。

最近、何故か皇帝は私の部屋で寝て行く。

なんの比喻でも、控え目な表現でも無く、本当にただ寝に来る。

今でこそ忠犬よろしく待っていますが、二回目に来た時は、驚きま  
したよ。

初夜失敗してるのに何で来たし。まさか仕切りなおし的な！？とド  
キマギしたのですが、完全なる自惚れでした…。

未だにチューさえされていない側室なんて、私くらいのものじゃな  
かろうか。

確かに私、色気ゼロですし。そんな気になれないのは当り前かもし  
れません……………落ち込んでなんかいません。いませんとも。

……………デリケートな部分なので、そつとしておいてやって下さい。

最初に赤っ恥かいて妙な期待をバツサリ切り捨てられたおかげか、  
最近はず直に接する事が出来る様になりました。

皇帝の態度を見る限り、私を女として見ているというより、ペット感覚な気がするんですよね。

よく撫でられるし、しかも触り方が全くいやらしくない。絵本くれたし…あれ、子供扱い??

何より、意識している女性…しかも妻を、ただ抱き締めるだけで寝るなんて、健康な青年男子のする事じゃないでしょう。

皇帝の態度は、あれですよ…えーと…あ、アニマルセラピー。

気付いた時は、好きな人にペット扱って…!!とショックを受けたりもしましたが、それでも好きなものは好きなんです。

元より、叶うはずの無い恋です。会えるだけでラッキーと思っておこうぜ私、と割り切る事にしました。

そう悟ってしまえば、もう怖いものではありません。

色っぽい方面の癒しは他の方にお任せして、ペットならペットの特権として思いっきり甘えさせていただきますよ。

それに割り切ってしまうえば、ペットポジションってかなりおいしいのです。

撫でて貰えるし、ぎゅうって抱き締めて寝てもらえるし。寝顔も見放題。

…あ、寝顔といえ、気になる事があるのですが。

皇帝は、他の方のところへ通っている時は、ちゃんと朝まで寝ているのでしょうか？

私のところへ来てくれる時は、深夜に来て夜明け前に帰ります。

それは恐らく一介のペットである私を寵妃だと、他の方に勘違いさせてしまわない為だと思いますが…彼の体が心配です。

私がおの方に嫌われてしまわない様に、他の方が傷付かない様に、配慮して下さるのは、とても嬉しいのですが、そんな事を繰り返しては、体が休まりません。

…やっぱり、早いとこ奥様方に仲良くなっていただかなければ。

無謀は承知。

ですが、私は私なりに、譲れないものがあります。

二回目に来て下さった貴方に、テンパった私が思わず『おかえりな

さい』と言ってしまった時に、見せてくれた笑顔を、

安堵したような、無防備なあの笑顔を、護りたいというのは、分不相応な願いなのでしょうか。

## 側室（仮）の挑戦。

さて。

姫様同士を仲良くさせようと意気込んでみたものの、正直ノープランです。

脊髄反射で生きてます。すみません。

取り敢えず、姫様同士を仲良くする前に、私が仲良くなってみようと思います。

ほぼ面識の無い女に仲立ちされても、気持ち悪がられるだけな気がしますので。

いきなりアズミ様とか難易度高過ぎなので、大人しく優しいシャロン様にまずはアタック。

……べ、別に最初から狙ってた訳じゃないですよ？

細くて可憐でぎゅーっとしたら壊れてしまいそうなシャロン様萌え！とか、私が男だったなら土下座してでも嫁に来て欲しいとこだよね…とか、思っていないんだから！！

……すみません。わたくし嘘をつきました。

リアルお姫様に超キュンキュンしておりました。

シャロン様が侍女の皆さんとの会話中、控えめな微笑みが、はにかむ様に少しくしゃりとなるのを遠目に見た時から、仲良くなったら間近であれ見れるのかなー…と羨ましがってたりもしました。

ですが!!

私リサーチによると、シャロン様のご趣味は手芸!!詩をしたためる事!!うん無理!!

…だって私一番の苦手科目、家庭科な女ですよ?

課題の浴衣を必死に仕上げようとはしたものの、何故か袖から腕が出ないし、測った筈なのに丈はつんつるてんだし。先生涙目だったよ…。

詩の方は……うん。

たぶん中学二年生的なものならいける気がする。

非常に頭悪さげなものが出来上がる気がします。

あ、それ以前に私、字が完璧じゃなかった。

皇帝陛下に貰った絵本のおかげで、なんとか五歳児程度の読み書きは出来る様にはなりましたが。

あれ、絵が入ってるから非常に助かる。流石皇帝…分かってる！！でもつい口が滑ったとはいえ、貴族の子女が読み書きがイマイチとか…アリなの？私迂濶過ぎない？

……ま、まあ、突っ込まれてないからセーフなんだよね？

で、話を戻しますが、趣味を介してシャロン様と仲良くなるう計画は、そんな訳で早々に頓挫しました。

私に女らしさを求めるのは、ペンギンに鳥らしさを求める位無謀だという事です。

うーむ。

腕組みをし唸っている私の前に、スツとティーカップが置かれた。

「…ありがとう、カナ。」

「はい。」

優しい微笑みを浮かべるカンナにお礼を言い、紅茶を飲む。

… 良い匂い。癒されるなあ。

こっちの世界にもお茶があつてよかった。残念ながら緑茶は無い様ですが。

発酵させずに飲む、という発想が無いのでしょうか。もしかしたら、貴族には知られていないだけで、地方を探せばあるのかもしれないね。

「…………お茶会とか、出来ればいいのに。」

「お茶会、ですか？」

私の独り言を拾ったカンナは、不思議そうに首を傾げる。

「うん。仲良くなりたいた方がいるんだけど…」

苦笑してみたが、無理な事は私にも分かっている。

お呼ばれするならともかく、身分が下な私が主宰のお茶会に招くという事は、明らかに不敬。

侮って喧嘩売っている、ととられる可能性が高い。

仲良くなるどころか嫌われてしまいます…。

お茶会でなくとも、隣り合って会話が出来れば、仲良くなる為の糸口が見つかるかもしれないのに。…こういつ時、身分ある立場って面倒だなんて思います。

「…どなたと仲良くなりたいのでしょうか？」

「……………え？」

少し沈黙し、思案する素振りを見せたカンナは、じっと私を見る。

「…シャロン様だけど？」

それがどうかした？と首を傾げる私に、カンナはニッコリと笑む。

「その方なら、お茶会を介さずとも、お近づきになれるかもしれないません。」

「えっ！？本当？」

…そんな会話をした、次の日。

私は今、東屋近くの物陰に隠れております。

時間は早朝とも呼ばれる時間です。

後宮の規則で取り決められている、部屋を出てもいいとされるギリギリな時間なので、人影はほぼありませんね。

侍女の皆さんは、活動を初めてらっしゃいますが、側室の皆様は朝の準備に忙しく、東屋に近づく方は皆無です。

何故そんな場所にいるかというと…

「…！」

カツン、コツンと、ゆったりとした足音が聞こえ、東屋の方を窺うと…本当に来ました！シャロン様です！

カナナが教えてくれた通り、シャロン様がいらっしゃいました。凄いな…カナナの情報網恐るべし。シャロン様のご趣味を調べてくれたのも実はカナナだったりします。

カンナって何者…？

モヤモヤしたものを抱えつつ、シャロン様へと視線を戻します。本日  
も美少女です。

「……………」

お一人で東屋に来たシャロン様は、懐から何かを取り出しました。  
ハンカチに何かを包んであるのでしょうか？此処からでは見えませ  
んが。

それを広げたシャロン様は、小さく口笛を吹きました。

「……………」

すると何処からともなく、小鳥が数羽下りてきました。

シャロン様が差し出した白魚の様な手に、警戒無くとまります。

……………成る程。餌付けしてらっしゃるんですね。

ハンカチに包んであったのは、パンクズか穀物的なものなんですよ。  
う。

「……………」

ぼんやりとソレを見守っていた私は、いつの間にか見惚れてしまっていました。

朝の光を透かし、キラキラと輝くプラチナブロンド。

繊細な美貌に穏やかな笑みを浮かべ、戯れる小鳥を愛しそうに見守る様は、まるで聖女のようで、

その光景は、お伽噺の挿し絵そのものだった。

「……………」

ぼけっと思守ってしまった私は、ついつい引き寄せられる様に、一歩踏み出す。

パキリ、と

足元で小枝か何か割れた音で、私は我に返った。

しまった、と思ってももう遅い。

「……………」

バサバサツと鳥が飛び立ち、シャロン様は弾かれた様に私の方を見て、大きく目を睜った。

「……………あ、」

「！」

内心ダラダラと冷や汗をかきながらも、私はへらりと笑い、彼女に声をかけようとしたが、

シャロン様は顔を反らし、逃げる様に駆けて行ってしまった…。

……………なにしてるの自分。

## 皇帝陛下の困惑。

「……………どうかしたか？」

またも深夜、忍んで訪れた部屋でオレを待っていてくれた少女に、オレはそう問うた。

何時も通り笑顔で、おかえりなさいと出迎えてくれたサラサの様子  
が、今日は少しだけおかしい。

嬉しそうな笑みも、オレのグラスに酒を注いでくれる仕草も何時も  
通りなのだが……………何故か今日は、いつもよりも距離がある。

41

心の距離などとは言わない。武骨な男が、精神論など語るつもりは  
無い……………物理的に、少し遠いのだ。

いつもは意識せずとも、柔らかで甘い彼女の香りを感じる位、  
戯れに伸ばした手が、容易く彼女の髪を絡め取れる位の距離なのに、

サラサが意識的にあけたであろう、人一人座れる位の隙間が、酷く  
落ち着かない気分させる。

「……………え、」

オレの問いに、彼女は目に見えて狼狽した。  
ソレを見て、この隙間が彼女の意志である事を確信する。

「……………サラサ？」

「……………う。」

体を退こうとした彼女の、寝台に付いていた手を上から重ねる様に  
押さえ、距離を詰める。

至近距離で真っ直ぐに瞳を覗き込めば、頬が薄らと赤く色付いた。

「……………オレが何かしたか？」

「……………へ？」

「気付かないうちに、お前に不快な思いをさせてしまったか？」

「……………え、は？」

オレの言葉に、ポカンと口をあけたサラサは、次いで戸惑う様に瞬  
きをする。

「そんな事、」

「…気を遣う必要は無い。嫌な事は、嫌と言ってくれ。」

慌ててかぶりを振るサラサの言葉を遮り、オレはそう続けた。

「オレは、気のきかぬ粗野な男だ。王族とはいっても、詩を諳じ樂を奏でる様な雅やかさなど欠片も持たぬ。……戦局は読めても、今お前が何を憂いているかは分からぬ情けない男だ。」

だからサラサ、嫌な事は嫌と言え。

でなければオレは、お前にどう触れたらいいか分からない。

そう、心のままに吐露すれば、サラサは愛らしい顔を、熟れた果実の様に真っ赤に染めた。

見開かれた目が戻るのに合わせ、眉も下がる。困り顔のままサラサは、上目遣いにオレを見る。可愛い。

「…陛下は、何もしてません。………これは私の問題なんです。」

つつい引き寄せられる様に、サラサの髪を撫でようとしたが、サラサは顔を反らす事でそれを避ける。

……これで、何もしてないと言われてもな。

「……サラサ？」

若干、恨みがましい目付きになってしまった様だ。サラサは、うっ、と言葉に詰まる。

やがてバツが悪そうに、彼女はポツリと呟いた。

「……これは何と申しますか……えーっと、罰則？」

「……は？」

「私なりに、私の気を引き締める為に決めた条件と申しますか……。」

「……サラサ？」

意思の疎通を図る為、名を呼ぶが、サラサはすっかり己の思考に捕らわれているようで、ぶつぶつと呟いている。

「私はダメダメです。初戦敗退したダメ子なのですよ。次は同じ失敗をしない為にも、罰の意味で陛下断ちといいますか……。」

「……オレ断ち？」

それは一体何だ。と目で問うと、キョトンと目を丸くしたサラサは、「願いが叶うように、好きなものを断つ…ようは願掛けなのです。」と、事も無げに言ったのけた。

意志薄弱な私は会う事まで断てませんでしたので…せめて接触断ちです。などと言つ愛らしい猫を、

まったく。

どうしてくれようか。

「…サラサ？」

「……はい。」

「その願掛けは、オレの罰にもなり得るのだが？」

「……………」

オレを見上げてくるサラサの顔には、『何で？』と思いつきり書いてある。…馬鹿正直というか素直というか。

こんなにも顔に出やすいと、さぞかし生き辛かろうと心配になったが、この手の人間は味方も多いな、と思い直した。現にオレは、出会ってまだ数ヶ月だというのに、無条件に近い信頼を寄せつつある。

こういう類たくいの人間を裏切るには、相当の覚悟もしくは、

相当の悪意が、必要だろう。

「……………お前はオレの癒しだ。…折角会いに来たのに触れないというのは、少々辛い。」

「！」

我ながら、夕チが悪い。何が少々か。

サラサの漆黒の艶やかな髪を指先に絡める様に一房掬い、引き寄せたそれに、チュ、と軽く唇を押しあてる。  
覗き込んだ彼女は、真っ赤な顔のまま固まってしまった。

「…サラサ？」

間近で瞳を合わせたまま、口元だけで笑ってみせると、サラサは忙しなく視線を彷徨わせた。

…あまり虐めるのは可哀想だが、オレにも譲歩出来ないものがある。

「…願掛けは、他の事にしないか？」

「……………。」

オレがそう提案すると、サラサは不服そうに眉を下げる。

小さく『一番じゃないと意味ない気がするのに』と呟いているが、

逆効果だとは分かっていないな。

…そんな風に真っ直ぐな好意を向けてくれる可愛いお前が隣にいて、触れられないなど…なんの拷問だ。

「…サラサ。」

「！」

意識的に声を低くし、耳元に囁く様に呼べば、抵抗していた可愛い猫は、あっさりと白旗を上げた。

「……………分かりました…止めます。別方面のものにしますです…。」

しゅん、と頂垂れた彼女の旋毛つむぎを見ながら、オレは満足げに笑む。

漸く得られた感触を堪能するべく、ゆっくりと手の平をサラサの頭に滑らせれば、直前まで暗い表情をしていたのが嘘かのように、サラサは嬉しそうに破顔した。

……………可愛い。可愛いが…お前、オレがいないところで、誰かに騙されるんじゃないぞ。

自分のした事を棚に上げ、心配してしまった事は、彼女には秘密にしておこう。

「……ところで、サラサ。何を失敗したんだ？」

「……………」

思う存分撫で、満足したオレは、彼女が注いでくれた酒を飲みつつ、気になっていた事を聞いた。

…さっきは彼女に触れられるか否かに重点を置いてしまったが、何に対しての反省だったのかまでは聞いていなかった。

サラサは手元の酒瓶を両手で握り、僅かに俯く。

「……可憐な小鳥さんを、怯えさせてしまいました。」

「……………」

小さな黒猫が、鳥に戯れつく光景が頭に一瞬浮かんだ自分に呆れつつ、頭を振る事でソレを追い払った。

「…小鳥？」

「凄く繊細で、とても綺麗な小鳥さんです。…いくら仲良くなりたかったからって、物陰から忍び寄るのはダメです。とうかきつと私の目が肉食獣ばりにギラギラとしていたのですよ。だから引いたんです。逃げちゃったんです。」

「……………」

…オレの目の届かないところで、この猫は一体何をしているんだろう。

内容はいまいち理解出来ないが、ズレた方向に一生懸命なのは分かった。

50

「……よくは分からないが、虐めようとした訳ではないのだろうか？」

「勿論です！」

「なら、嫌われてはいないのではないか？」

「……………」

不安そうに表情を曇らせるサラサを、安心させる様にオレは笑った。

「敵意や害意が無い事が分かれば、時間はかかるかもしれないが、

いつかは打ち解けられるんじゃないか？」

「……………はい。」

素直に頷き微笑むサラサを見ながら、オレはひっそりと苦笑を浮かべた。

サラサのいう『小鳥』が、比喩なのかそれとも言葉通りのものなのかは分からない。

…本物の野生の小鳥と仲良くなるうとする、などという突飛な発想が否定出来ないのが、サラサがサラサである所以なのだろうか…、

一体、何をし始めようとしているのか。

…本当にこの猫は、目が離せない。

## 側室（仮）の反省。

皇帝と、そんな話をした翌日。

またも早朝から東屋へ向かった。

……懲りないなあ、って思うでしょう。

ですが一応、私なりに考えての事なのです。

シヤロン様は、あのご様子からすると、数日は此処に近寄らなくなってしまうんじゃないかと思ひまして。

「……………」。

現に、いらっしゃいません。

前日の時間を、過ぎているにも関わらず。

…やはり、私が不用意に驚かせてしまったせいですよね。

近くの柱に手を突いて、頂垂れそうになったのを堪え、私はぐっと前を向きました。

私が今やるべきは、反省会ではありません。それはまた今夜にでもやろうと思います。

今まず優先しなければいけない事は……

懐に手を入れ、ハンカチに包んだものを取り出す。

ジャジャーン！と効果音を入れながら。…勿論心の中ですよ。

これは何かと言いますと…カナナに用意してもらった穀物です。たぶん稗ひえとか粟あわとかそんな感じ。

私のせいで、シャロン様にご飯を貰えなくなってしまった小鳥さん達の朝ご飯です。

さあ、おいでませー！

「……………あれ？」

ジャジャーンと広げたまんまのハンカチを手に、私は立ち尽くす。

…朝なので、小鳥さんの囁きは聞こえてきますが、全く下りてくる

様子が無いですね………なんでも。

「……うーん。」

一生懸命頭を捻り、昨日の光景を思い出してみる。

白く細い手を差し出し、手の平や肩で戯れる小鳥を愛でるシャロン様、マジ天使。

……ではなくて。

もう少し前………あ。

そういえば、口笛で呼んでました！

なるほどなるほど。

では！

「……………」。

口を窄め、息を吐く私の唇からは、ヒュー…プスー…という何とも物悲しい音が洩れた…。

…そういえば、私、口笛吹けないんだった。

…なに？お前、なんなら出来るの？って顔で見ないで下さい！

例え口笛さえも吹けない裁縫も出来ない…ないない尽くしの団子蟲でも、生きているんだから一応…！

…自分で言って哀しくなりました。でも一応、私にも特技的なものはあるんですよ。

シャロン様みたいに女の子らしさを期待されると大変困りますが…

「……………あの、」

あ、でもお掃除は好きです。雑巾の絞り方には定評があります。窓掃除とか、ピカピカになっていく過程が超楽しいですよ…身長がチマいので、脚立は必須ですけど。

「……………あ、あの…」

料理は…壊滅的に下手ではありませんが、上手とは言えませんね。…何というか、とても微妙なものが出来上がります。

砂糖と塩を間違えるベタさは無いものの、ウスターソースとオイスターソースを…薄口と濃口醤油を等、地味なミスを繰り返す為、

…食べられない事は無い…が、美味しいとも言えない、という、大変反応に困る仕上がりとなります。

幼なじみの男の子にはよく、『お前の料理はじんわりマズい。』と評価されてましたっけ…。

「……………あ、…あのっ!!」

「ひよっ…!？」

遠い目をして過去を懐かしんでいた私は、背後から大きめの声をかけられ、息を飲む。

…変な声が出ました。

バクバク早鐘を打つ胸を押さえながら、後ろを振り返ると、そこには…

白皙の美貌を、緊張の為か赤く染めた、

可憐な天使…ではなく、今日も可愛いシャロン様が立っております。

.

## 側室（仮）の提案。

「……………」

「……………」

私達は互いに無言のまま、暫し見つめ合った。

…ただしその様子は真逆です。

緊張で倒れてしまうんじゃないかという位、頬を赤らめるシャロン様。

…そして、そんなシャロン様をガン見する私。

だって、可愛い可愛いシャロン様が、こんな間近に！！しかも緊張で涙目なんですよ！？

そりゃガッツリ見るでしょう。こんな機会早々ありませんからね。

「……………」

ああ、可愛い…。

ピルピル震えている…多分此処で私が『わっ!!』とか大きな声を出したら泣いてしまうんじゃないかと思えます。

……ああ、駄目よ沙羅。やってみたい…超やってみたいと思っちゃ。

「……………あ、の」

悶々としている私に、シャロン様は小さな声で話し掛けてきた。

それによって私は、危うい方向に行きかけていた頭を正常に戻す事が出来ました。

…危ない危ない。

仮にも側室でありながら、開けてはいけない扉を開けるところでしたよ。

「はい。何でしょう?」

へらりと笑みかけると、シャロンは漸く、少しだけ肩の力を抜いた。

よかった。近所のちびっ子相手に鍛えた『警戒心を抱かせないスマイル』が有効な様です。

私安全、コワクナイヨー。

「……昨日、此処にいらした方ですよね……？」

「……………はい。」

シャロン様の質問に、今度は私が拳動不審になる。

誤魔化しようが無いから頷いたけど、変質者扱いされないよね……？

シャロン様は、少し躊躇った後、決意した様に面をあげた。  
長い睫毛に縁取られた空色の瞳が、懇願する様に私を見る。

「……………黙っていては、下さいませんか……？」

「……………はい？」

……………え？何を……？

予想外の言葉に、私はキョトンと目を瞠る。

だがシャロン様は、そんな私の間抜け面が目に入っていないのか、  
泣きそうな顔で言葉を続けた。

「……………餌付けなんて、してはいけない事は分かっているんです。……」

侍女にも止められておりますし。」

…えっ！？駄目なの？

私いま、思いつきりやろうと思っていましたが、  
ていうか今現在餌を持っているんですが。

自分の事に必死なシャロン様は、私の手元のハンカチが何を包んで  
いるかまで思い至らないようです。

「……規則には、」

「…規則には書いてありません。ですが、皆様が暮らしている場所  
で、その様な勝手は許されませんかでしょう？」

控え目に口を挟んだ私に、シャロン様は力無い笑みを浮かべる。

「…私は王女とはいえ、辺境の国に住んでいた田舎者。…皆様が当  
り前に出来る事さえ聞かなければ分からない、常識知らずなのです。」

「……………」。

悲しそうな表情には、諦めや卑屈さが混在していた。

予想でしかないけれど、それらの言葉は、此処にきてからシャロン  
様が、誰かに言われた事なんじゃないでしょうか。

少し外れた行動を、こつも恐れるのは、何かをする度に、誰かに嘲笑われたから。

所詮、田舎者と、影口をたたかれたからなのでは。

「……………」

規則に書いてないなら、いいんじゃないですか、と開き直るには、私くらいの凶太さが必要ですからね…。

繊細で大人しいシャロン様には無理かもです。

……………うーん。

どうでしょう。

「……………あ。」

「……………？」

…忘れていました。

東屋の欄干に、昨日シャロン様が餌をあげていた小鳥たちがとまったのを見て、私は手元の餌の存在を思い出す。

シャロン様から視線を外し、私は小鳥たちに向かって餌を差し出した。

「……………しかし当然の事ながら、近付いてくれません。私無害。コワクナイヨー。」

しょんぼりとしながらも、欄干に少しだけ餌を置いた。

そして離れると、小鳥の一羽がちよこちよこ近寄ってきて、それを啄む。

よかったー。

一羽、一羽と増えてゆき、みんなで私の餌を食べてくれる。本物の小鳥さんは、警戒をといてくださった様。

「……………。」

振り返ると、綺麗な青い瞳を睨るシャロン様。

此方の小鳥さんも、警戒をといてくださると嬉しいのですが…。

私はもう一度、シャロン様にへラリと笑い掛ける。

「…これで同罪です。」

更に大きく睨られた瞳を見つめながら、『二人きりの秘密にしまし  
よう』と小さく呟くと、

見開かれていた青空から、雨粒みたいな雫がこぼれ落ちた。

## 側室（仮）の発起。

「……………美味しい。」

カンナの淹れてくれたお茶を飲み、ゆっくり深呼吸をしたシャロン様は、そう小さく呟いた。

「よかったです。」

落ち着いた様子のシャロン様に、私も漸く安堵の息をついた。

もう涙は零れていないものの、目は充血しているし、目元も鼻の頭も赤い。

一目で泣いた事がバレてしまうシャロン様をお部屋に帰すわけにもいかないのです、一時私の部屋に避難していただきました。

侍女の皆さんが心配してしまうので、言伝をカンナにお願いしたので、今は部屋に二人きりです。

「落ち着きました？」

「……………」

私の問いかけに、シャロン様はコクリと頷く。カップを置くと、顔を上げ、じっと見つめていた私と視線を合わせた。

「…ご迷惑をおかけ致しました。」

ゆっくりと、だが綺麗な所作で頭を下げるシャロン様に、私は慌ててかぶりを振る。

「迷惑じゃないです！！寧ろ役得…じゃなかった…此方こそ驚かせてしまって。」

やっぱり本音がダダ洩れた。言い繕う私をシャロン様は不審に思う事は無かったようで、穏やかな微笑を浮かべ『ありがとうございます。』と言ってくれた。

それから少し恥じる様に頬を染める。

「…子供みたいに泣いてしまって…驚かれましたよう?。」

「いえ！寧ろ激萌えた……………ゴホン、…不安定な時くらい、誰にで

もありません。」

…うん、自重しようか私。

さっきから言動が変質者だから。なんか最近女子高生の皮を被ったオッサンになりつつあるから。

冷や汗をかきながらも、誤魔化す為にヘラリと笑むと、シャロン様は不思議そうに首を傾げた後、ニコ、と控え目に笑んだ。

「……私、此処に来てから、優しくされた事がなくて……あ、勿論侍女の皆は良くしてくれるんですが…対等に話して下さる方がいなくて……その、嬉しかったんです。」

「……………!!!!」

シャロン様は、僅かに俯きながら、はにかむ様にクシャリと相好を崩す。

不意討ちに見てしまった私は、思わず顔を真っ赤に染めた。

…へ、変態とか言っちゃダメです。

だって見たかった笑顔が、こんな早く、しかも間近で見れたんですよ!?!?

…ていうか、可愛いー…!!!!!!

ガン見している私には気付かず、シャロン様は俯き加減のまま話を続ける。

旋毛も愛い

「…故国は、寒さ厳しい国でした。冬がとても長く、ほんの僅かな夏の間だけ訪れる渡り鳥はいましたが…あんな色鮮やかな鳥は、初めて見たのです。…だから、どうしても近くで見たくて。」

「…それで餌付けなさってたんですか。」

成る程。

確かに、鮮やかな鳥って寒い所にはいなそうなイメージだね。

「……………そんな事をしては、他の皆様の迷惑になるかもしれない、と分かっていたのですが、止められなかった。……………私は寂しかったのかもしれない。」

「……………シャロン様。」

「……………ですから、あの……………これからも、仲良くしていただけますか……………?」

「勿論……！！！」

思わず私がこぶしを握り締めて断言すると、シャロン様のお顔が嬉しそつに綻ぶ。

ああもう何ですかこの子。ぎゅうってしたいぎゅうってしたいー！！！！

「……良かった。……此処に来て初めて、優しい方にお会いしました。」

「えっ、そんな事ありませんっ！」

そんな、おこがましい！！

私なんて、側室の皮を被ったセクハラオヤジですよ！？

ぶんぶん首を振って否定する私を見て、シャロン様は、何かを思い返す様に、伏し目がちに微笑する。

「……私、此処がずっと怖かったんです。他の側室の方も、衛兵も侍女も、……陛下も。」

「陛下も……？」

私は、シャロン様の言葉に、瞠目した。

私の中の陛下は、とても誠実で優しい人。

何を怖がる事があるのだろうか、と思う。

だけどシャロン様は、堅い表情のまま続けた。

「…王族に生まれたからには、政略結婚は当然です。…ですが、<sup>こ</sup>鴻<sup>う</sup>帝に嫁ぐ心の準備は出来ておりませんでした。」

「……………?」

鴻帝とは、鴻国の王を、他国の人間が呼ぶ別称、とは聞いていたけれど…何か違和感を感じた。

それは、発音的な問題だけじゃなくて……………怯え、畏怖の様な。

「……………。」

私は、この国の事を…………いや、この世界の事を、何も知らない。

突貫的に詰め込まれた少ない知識だけでは、分からない事だらけだ。

シャロン様の国の場所も、

青い鳥の名前も穀物の名前も、

シャロン様の、怯えの理由も。

「……………」。

…いいえ。私は、頭では分かっている筈です。

シャロン様の国は、鴻国の藩属国だと教えられました。

その時に、頭の片隅で思ったじゃないですか。

…戦争があつたのかな、って。

現代つこの私には、テレビ画面の向こうの出来事。

でも此処では、現実…そう現実なのです。

…目を逸らすのは、ダメなのですよ、私。

これを機に、学ばなければいけないのかもしれないかもしれません。

思い立ったが吉日です。

私は早速、図書館に行く事にしました。

「…ふわー。結構大きいんですね。」

書庫に使われている建物を見上げながら、私は独り言をこぼす。

取り敢えず、勉強しようと思いついた私は、王宮内にあるであろう図書館を使えないかとカンナに相談してみた。

そうしたらカンナは、にっこりと笑いながら、『書庫でしたら、後宮内にもございますよ。』と教えてくれた。

なんでも、何代か前の皇帝が寵妃の為に建てたらしい。他の建物に比べ華美さは無いものの、結構立派な造りで、蔵書量も中々のもの。

…ただし、利用者はほぼ皆無。側室の方々は、本に興味は無いようです。

大きな扉を押すと、ギィ、と重々しい音をたててゆっくりと開く。

「…お邪魔します。」

誰に向けるでも無く呟いて、室内へと身を滑り込ませた。

「……………」

ほぼ利用者がいないと聞いていたが、ちゃんと掃除は行き届いている様で、埃っぽさは無い。

少し冷えた空気に、本独特のにおい。シンとした空間は、扉一枚隔てただけなのに、まるで外界から隔絶されたかのような雰囲気があった。

カッン、

自分の靴音が、静かな室内にやけに響く。

いくつも並ぶ棚の一つに近付き、最近身につけたばかりの拙い語学力で何とか背表紙の文字を読んだ。

えーと……礼儀作法……は、まだいいや。  
……香とかも今はいいです。

……とりあえず、地図が見たいんだけどなあ。

後、歴史書とか。

私レベルに落としてくれてあると尚よし。『よくわかる鴻国の歴史』  
とか『教えて偉い人』みたいなもの。

……え、ある訳無い???

いやいや。皇帝のお子さんだって、初めは後宮にいるわけですし、  
あるかもですよ。

「……………」

背表紙の文字を追いながら、私は奥へと進む。

カツン、コツン、と足音を響かせながら。

「……………歴史、…歴史。」

ブツブツと独り言を繰り返しながら、私は必死に本を探していた。

「……………歴史、」

「歴史書なら、」

「…っ!？」

ふいに、私の独り言に返事が返った。

何の覚悟もしていなかった私は、驚きに一瞬息を止める。

「…歴史書なら、その左隣の棚よ。」

割り込んだ声は、落ち着いたアルトボイス。

静かで凜とした…まるでこの書庫の様な声の主人を探すべく首をめぐらせるよ、

その人は、一段高い場所から私を興味深そうに見ていた。

キツチリと纏め結び上げられた黒髪と、理知的な美貌。派手さは全く無いが、趣味の良い落ち着いた装い。

……… なんですか、この知的美人さんは。

呆然と見上げる私を、美人さんは、上から下まで眺め、ふうん、と意味ありげに頷く。

薄紅色の唇が、ゆるりと口角を上げ、魅惑的な微笑を浮かべた。

「……… 此処に、皇帝の寵以外を欲する女がまだいたのね。」

「……… え？」

首を傾げる私に、美人さんは、あら、と同じ様に首を傾げた。

「……… それとも、皇帝の寵愛を受ける術すべでも学びにきたのかしら？」

その言い方には、明らかに刺があった。

声も、敵意はないものの、決して好意的とは言い難い。

……… なにやら、返事が遅くなった事で嫌われてしまったのでしょうか。

少し残念に思いつつも、私は正直に答えを返した。

「…よくは分かりませんが、皇帝陛下の寵は欲しいです。」

「……………」

私がそう返すと、美人さんは興味を無くした様に冷めた目になった。本格的に嫌われてしまったようです。

ですが、いいえと言えば嘘になります。

「私は陛下が大好きなので、陛下にも好きになっていただきたいと思っております。」

「……………え？」

美人さんは、私がそう付け足すと、何故か吊り上がり気味の瞳を睥った。

……………私は何か、変な事を言ったのでしょうか？

目を見開いたまま私を見つめる美人さんに、内心首を傾げつつも、私は彼女に向かって頭を下げた。

「ですが、今必要なのは歴史書なのです。…場所を教えてください、ありがとうございます。」

「……………」

長い沈黙が落ちる。

お礼が言えてスッキリした私が、顔を上げると、なんともいえない顔をしていた美人さんは、小さくポツリと呟いた。

「……………変な子。」と。

「何が知りたいの？」

私の阿呆さ加減に毒気を抜かれたのか、美人さんは呆れた様に嘆息した後、私にそう投げ掛けた。

階段を下り、私の隣に立った美人さんは、私の返答を待たずして、本棚から本を抜き取って行く。

「鴻国の歴史でいいのよね？時代によって本がわかれているから、触りだけ知りたいのなら、この辺りがいいと思うわ。逆に詳細に知りたいのなら、これね。お堅い文章だけれど、史実に沿って書かれているから、変な偏りが無くていいの。…この辺りは面白いけれど、推測が織り交ぜてあるから暇潰し程度に止めておくことね。」

「じ、じ丁寧にありがとうございます。」

耳に心地よいアルトボイスが、流暢に響く。

まるで司書の方の様に、求めている以上の説明を与えてくれる美人さんに、私は吃りながらもお礼を述べた。

「…で？どの辺り？」

にっこりと笑みを浮かべる美人さんは、まるで水を得た魚の様に生き生きとしている。

…本が、とても好きなんですネ。

年上の女性に、可愛らしい、なんて失礼でしょうか。

へらりと笑み返ししながら、私は答えた。

「……えっと、初めから通して知りたいのですが、…一番知りたいのは今、でしょうか。」

「…今？」

「はい。…少し前から、今に至るまで…現皇帝陛下が、どの様に生きてこられたのかを。」

「……………」

私の言葉に、美人さんは驚きと呆れが入り交じった様な顔をした。

「…陛下の事が好きって、本当なのね。」

「はい。」

美人さんは、迷い無く頷いた私をじっと見たが、やがて理知的な美貌に苦笑を浮かべながら、手元の本を棚に戻した。

「……確かに、魅力的な方だね。皇帝という地位を差し引いても、女なら一度は抱いて欲しいと夢見るかもしれないわね。」

…何でしょう。

誉めている筈なのに、美人さんの言葉はとても客観的で冷静です。まるで、その括りの中に、自分はカウントしていないかの様に。

不思議に思いつつも、その大多数の女性の枠に納まっている私は、素直に頷いた。

「そうですね。とてもお優しいですし。」

「…え？」

本を棚に戻していた美人さんは、一拍置いて訝しむ様な声とともに、私を振り返る。

硬質な光を宿す瞳が、品定めをするように私を見た。

「……そういえば貴方、陛下の事を知りたいと言っていたわね。…  
…現時点でどれくらい知識があるのかしら。」

「……………」

言われて私は戸惑った。

私がサラサの実家で教わった知識の中に、陛下に関する事は殆ど無い。

それは箱入り娘であった本物のサラサ自身が、政治や王族に関する知識をほぼ持たないから、と説明されていたが…今となっては、意図的に隠していたのではないかとさえ思う。

そしてその隠された意図が、シャロン様の怯えや、美人さんの驚きの示すものなのではないかと。

「……………」

「……………」呆れた。貴方のご両親は、貴方を箱にでも納めていたのかしら。

私の沈黙に答えを読み取った美人さんは、ため息をつき、肩を竦めた。

「…でも、だからこそ、そんなに真っ直ぐ慕えるのね。」

「……………」

…私は、何も返す事が出来ませんでした。

無知な私は、此处で否定するだけの材料を持ちません。

そんな事無い。陛下の何を知ったって、私はあの方が好き。…そんなのは、ただの理想論です。目を逸らしているだけです。

知ってからでなければ、私は胸をはって、好きだと言い切る事も出来ない。

「……………」

棚に本をしまい終えた美人さんは、俯いた私を見て、暫し何か考え事をしていた。

そしてしまった本の代わりに、彼女は一冊の本を取り出す。

無言で手渡されたソレを開くと、それは…

「……………地図？」

「…貴方、時間はある？」

「…はい。」

「じゃあ、私が簡単に教えてあげるわ。」

「……え、」

驚きに目を丸くする私に構わず、彼女は話を進める。

曰く、長くなるから、既存の歴史書は今はいい。

もし興味があるなら、後で自分で読みなさい、との事。

「…いいんですか？」

戸惑う私に、美人さんは形の良い魅惑的な唇を、吊り上げた。

「いいわよ。これはただの好奇心。知識を得た後でも、その真つ直ぐな愛情が歪み無くいられるのか……そんな、質の悪い知識欲だから。」

美人さんの言葉を聞きながら、私は無意識に、手のひらを握り締めただけでした。

## 側室（仮）の勉強。

「鴻国の歴史は、侵略の歴史。」

書庫の一角に設置されていたテーブルに地図を広げると、美人さんはそう語り始めた。

クリーム色の紙に書かれた地図は、やはり私には見覚えの無いもので、此処が異世界である事を改めて感じる。

地図に描かれているのは、犬の横顔のような形の大陸が一つ。そしてその鼻先から口の辺りにかけて、大きめ島が二つ。

小さな島を除けば、描かれているのはそれだけ。

この世界に大陸が他には無いのか、それとも航海の技術が発展していない等の理由で発見されていないのかは、判断がつかない。

「この国は、初めは小さな国だった。…鴻国の前身は、大陸の南方にあった国『采<sup>さい</sup>』。農業が盛んな小国にすぎなかったわ。」

美人さんは犬の下顎の辺りを指差し、この辺りね、と指先で小さな円をかいた。

「その小さな国は、ある日襲撃を受けた。…襲ったのは、故郷を持たない流浪の民『鴻』。一族の大半の人間が傭兵などを生業としていた、戦闘部族相手に、農業国に勝ち目など無く、『采』はあつさり滅びたそうよ。」

「……それじゃあ、鴻国を起こしたのは、」

「そう。王族全員を処刑し、新たな王として立ったのは、侵略した部族の長。国名を部族の名と同じ『鴻』と定めた男が、鴻国の始祖よ。」

美人さんが言った通り、鴻国の歴史は侵略の歴史だった。

戦闘に特化した部族が治める国は、次々と戦争をおこし、周辺諸国を飲み込んでアメーバの如く国土を広げていったそうだ。

サラリと説明された美人さんの言葉は、シンプル故に包み隠さず、全編通して実に血なまぐさかった…。

今の鴻国の国土は、大陸の約三分の一。

現時点では戦争は無いものの、数年前までは争いがあつたらしい。鴻国の北に位置し、険しい山を挟んだ隣国である『レダ』は、シャロン様の母国。先の戦争で鴻国に敗れた国と同盟を結んでいた為、終戦後、鴻国の藩属国となったという。

……シャロン様が、怖がるのは無理のない話でした。

負けた国のお姫様が、元敵国へ嫁ぐ。…それは想像以上の恐ろしさでしょう。

「ちなみに、『レダ』の同盟国『カイロア』を滅ぼしたのは、現皇帝陛下よ。」

「……………え……………？」

私は、目を大きく見開いた。

ついでの様にあっさりと告げられた言葉に、何の対処も出来ずに、ただ呆然とする。

「戦争を起こしたのは先帝であるあの方の父君だけれど、指揮をとり、戦の勝利を掴み取ったのは、現皇帝陛下。」

皇太子でありながら前線で指揮し、馬を駆り敵を屠る彼の人を、自国の民は『軍神』と、他国の民は『死神』と呼んだという。

個人の能力もずば抜けているが、戦略を練り人を動かす事に長ける彼は、指揮を任された戦い全てを勝利へと導き、鴻国の発展に多大な貢献をした。

…自国から見れば、ヒーローであり守り神であっても、他国から見れば、侵略者で略奪者。

呆然としたままの私を一瞥し、美人さんは、地図をパタンと閉じた。

「…通り過ぎた後に血の道が築かれる、血塗れの『紅帝』。……お嬢様の初恋相手としては、少々厄介すぎやしないかしら？」

「……私は、」

「…貴方が優しいと感じたあの方の手は、沢山の人間の血に塗れているわ。…直接的ではないかもしれないけれどその中には、貴方位の女の子や、小さな子供のものも、含まれている。」

「……………」

一言も発しなくなった私を、美人さんはじつと見ていた。

質の悪い好奇心、と言っていたのに、その瞳は、思慮深い光を宿している。

「……あの方は、貴方の手に負える様な方ではないわ。」

背負いきれないのなら、聞かなかった事にするのも選択肢の一つよ。

そんな言葉を聞きながら、私は握り締めていた手をゆっくりと開き、手の平を見つめていた。

側室（仮）の葛藤。

「……………」。

…パラリ、

室内に、本のページを捲る渴いた音だけが一定間隔に響く。

私は灯籠を窓辺に置き、分厚い本を黙って読んでいた。

もう、どれ位そうしていたでしょうか。

気遣わしげな声が、かけられました。

「……………サラサ様。」

「……………え？」

呼ばれた声に鈍く反応し、ぼんやりと、顔を上げると愛らしい顔を心配そうに歪めるカナナと目が合った。

「……………カナナ、」

「……………夜も大分更けてまいりました。今日はもうお休みになっ  
てはいかがでしょうか。」

「…もう、そんな時間なんだ。」

本を読み始めた時には、オレンジ色から藍色のグラデーションだっ  
た空はもう真っ黒で、雲一つ無い夜空に浮かぶ月は大分高い位置に  
あった。

何時間こうしていたんでしよう。

拙い語学力ながらも、大分読み進めた本に手作りの栞を挟み、小さ  
く息を吐き出した。

体のあちこちが固まり、動かすとコキコキと音がする。伸びをして  
体の強張りを緩和させると、カンナに向かって頷いた。

「…分かったわ。…遅くまでつきあわせてしまっ  
て御免なさい。」

「…いいえ。」

優しい微笑を浮かべ、おやすみなさいませ、と頭を下げたカンナは  
退室した。

「……………」。

本を丁寧に引き出しに仕舞い、灯籠を持って寝室へと移動する。ベッドサイドに置かれた台にそれを置くと、行儀悪くも、寝台に転がる様に体を投げ出しました。

「……………」。

大分見慣れてきた白い天井を見上げ、両手を突き出す。

同じ年頃の少女と比べると、節ふし樽くね立った醜い手です。白くはあるものの、少女らしい柔らかかさの無い手。

…それでも、この世界の市井の少女らに比べれば、苦勞の無い手だ  
と思います。

実際、苦勞した事などありません。

家事は母がやってくれていたし、アルバイトもした事が無い。

友達と喧嘩はしたけれど、すぐに仲直りするし、不器用に心配してくれた幼なじみもいた。

命の危険なんて、遠い世界の出来事でした。

「……………」

戦争なんて、未だに実感が無い。実際この世界に迷い込んでからも、私に身の危険が迫った事など無く、こうしてぬくぬくと、何不自由無く守られている身分です。

戦争の怖さが、本当の意味で分かる筈無い。

…それでも、考えてみた。

『陛下』が戦争で他国を滅ぼした、と聞いても実感湧かなくとも、もし、目の前に『殺人者』がいるのだとしたら、空想だろうと夢だろうと、私は恐ろしいと感じるだろう。

……私は、陛下が怖いのでしょうか。

優しく私の髪を撫でてくれるあの手が、幾多の命を刈ったと知って、触れられる事を嫌悪するのでしょうか。

あまり上等では無い私の脳ミソが、パンクしそうです。

…本当に私はダメ子ですね。

今更そこに… 『陛下が好きで、陛下の為に何かしたい』という大前提がブレるとは思いませんでした。

何があっても好きだと言い切れる程、私はあの方の事を知らないのです。

…カタン、

「……………っ、」

グルグルと考え込んでいた私の耳に、小さな物音が飛び込んできた。慌て私は、身を起こす。

…キィ、

次いで、静かに扉を開ける音。

…こんな深夜に、此処を訪れる方は、一人だけ。暗殺者や泥棒さんが、わざわざ音をたてるとも思えませんし。

こんなぐちゃぐちゃな気持ちのまま、私はあの方に会う事になるよ  
うです。

「……………」。

寝台の上で俯いた私の耳に、美人さんの言葉が蘇った。

『背負いきれないのなら、聞かなかつた事にするのも選択肢の一つ  
よ。』

「……………」

「…………サラサ、起きているか？」

靡ごしに、控え目な声をかけてくれる陛下に、私は、顔をあげる。

なんの心の準備も出来ていません。正直、今は会わない方がいいん  
じゃないかとも思いました。

…でも、頭の出来の良くない私は、会わないままではさっきまでの  
様に、悶々と悩み続けるでしょう。

きつと答えは出ません。

なにを予想したところで、予想は現実では無いのです。聞かなかつた事にしても、同じ。現実は何も変わらない。

ねえ、わたし。

考える事が無駄なら、  
会ってから、決めましょう。

私は寝台の上で居住まいを正す。  
正座し、膝の上に手を添えた私は、『はい。』と返事を返す。

ゆっくりと扉が開いて、薄明かりの中でも雄々しい美貌の主が、姿を現した。

「……サラサ？」

寝台の上にいる私を見て、切れ長な瞳が睜られる。

切腹する武士みたいな姿の私が、おかしかつたんだろう。不思議そうに首を傾げる皇帝を、私はじつと無言で見つめたのだった。

.

「……………サラサ？」

何時もと違う私に、皇帝は戸惑った様にもう一度名前を呼んだ。

「……………。」

ゆっくりと近付いてきた皇帝は、私の近くに腰をおろす。

間近で覗き込まれ、ゴツゴツとした大きな手が、私の頬をゆるりと撫でた。

「……………っ、」

「……………？」

息を飲む私に、皇帝は益々訝しむ様な顔になった。

でも私は、自分の事に精一杯。陛下を気遣う心の余裕がありません。

何かを感じ取ったのか、彼は、私の頬から手を離れた。

「……………」

沈黙が、落ちる。

何時もの穏やかな静けさでは無く、限りなく気まづいソレを、気に掛ける事も、今の私には出来ません。

ああ、どうしよう。

どう、しましょう。

「……………サラ、サ」

陛下の音が、低く擦れる。

胸につかえた何かを無理矢理飲み込んだかの様な、途切れがちの声に陛下を見れば、彼の顔は強張っていた。

初めて見る、怖い顔。

初めて聞く、怖い声。

今まで意識しておりませんでした。夜着の間から覗く肌には、沢

山の傷があります。

大きいもの、小さいもの。古いものに、新しいもの。

多分、着物を脱いだら、もっと沢山…身体中にあるのでしょうか。

この方の、戦いの歴史が。

「……………」。

書物の中の出来事だった、美人さんのお話が、急に現実味を帯びる。

壁に立て掛けられた、陛下の剣が赤く染められた事は、たぶん一度や二度では無いのだ、と、

漸く私の頭が、理解した。

……………嗚呼、それなのに。

「……………陛下。」

「……………」

呼ぶと、身構える様にビクリ、と体が跳ねた皇帝を見つめながら、  
私は

ゆっくりと、頭を下げた。

「……………おかえりなさいませ。」

「…っ！」

息を詰める音がして、顔をあげた私の目に、驚き顔の彼がうつつた。

何時もの様にへらりと笑うと、彼の強張りが、だんだんと解けていく。

「……………ただいま。」

陛下の整った顔が、泣き笑う様に歪む。

長い長い息をついて、噛み締める様に呟くこの方が、私は愛しい。

そう。愛しい。

愛しいの。

この方を想う気持ちは、1ミリだって減らなかつた。

私は、私が思う程、高潔な精神をしていないようです。寧ろ非道です。

見た事の無い幼子の未来を憂うよりも、この方の、痛みを取り除いてあげたいのです。

会った事のない少女の命を悼むよりも、この方の心を癒したいのです。

安堵した様に私の肩口に凭れる陛下を見つめながら、私は笑む。

「……陛下。」

「…ん？」

胸に走る痛みは、今は飲み込んでしましましょう。

正義感も罪悪感も、今はありません。

ちっぽけな私の手では、救えるものなんて、ほんの少しなのです。あれもこれもと手を伸ばして、全て溢してしまうよりは、

今は、無防備に笑ってくれるこの方を、護りましょう。

「お疲れでしょう…膝枕、如何ですか？旦那様。」

「……………は？」

ポンポン、と正座したままの膝を叩くと、皇帝は目を丸くする。  
呆気にとられた顔は、いつもより幼く見えた。

「……………。」

戸惑ったように視線を彷徨わせた彼は、口元を手で覆いながら、横を向いてしまった。

「…陛下？」

「……………」

「…お嫌でしたか？」

「……………いや。」

暫く間をあけて、漸く此方を向いてくれた陛下の顔は、少し赤かった。

「嬉しいよ。……だが、その…照れる。」

「膝枕がですか？」

横になり、私の膝に頭をのせた陛下は、照れながら苦笑を浮かべた。

「膝枕もだが……旦那様、というのが。」

「……………」

「15？人も奥様がいながら、何ですかそれは。」

啞然とした私を、下から見つめていた陛下は、口元を緩め、苦笑を穏やかな微笑へと変える。

伸びた武骨な手が、スルリ、と私の頬を撫でた。

「…照れる…が、…嬉しいものだな。」

「……………そうですか。」

瞳を細める陛下と同じ様に、私も自然笑顔になったのでした。

## 皇帝陛下の葛藤。

息が、止まるかと思った。

今日も遅くにサラサの元を訪れると、彼女の様子がおかしい。

いつも満面の笑みでオレを出迎えてくれるサラサは、少し強張った顔で戸惑う様にオレを見る。

オレが傍へと行っても、彼女は笑顔を見せてくれないし、薄紅色の唇からは、『おかえりなさい』の言葉がこぼれ落ちる事はなかった。

隣に腰をおろして、サラサの柔らかな頬を撫でると、ビクッと跳ね、益々表情が固くなった。

「……………」

それが駄目押し。

今日のサラサは、オレを拒んでいる。

そう理解した瞬間、指先から凍り付く様な恐怖を感じた。

「…………サラ、サ……」

無様に擦れた声は、自分のものでは無いようだった。  
こんなにも動揺する自分を、みっともないと思う余裕すら無い。

何故だ。何故オレは、彼女に拒絶された。

昨夜訪れた時は、何時も通りだったのに。  
ニコニコと笑いながら、友達が出来たと教えてくれていたのに。

…………友達？

…まさか、誰かが何かを吹き込んだのか？

サラサは初めて会った時は、緊張して少し怯えていたが、それはオレにというより未知の行為に対してだった様に思う。現に、何もしないと分かると、それは愛らしい笑顔を見せてくれたから。

もしかしたらこの娘は、オレの事を何も知らないのかもしれない。

父母に甘やかされ、血なまぐさい話は遠ざけられてきたのだろう。

だから、こんな笑みを見せてくれるんだ。

そう結論付け、ならばこれから何も知らせない様にしようと思った。幸い後宮の女どもは、美容と流行りの衣裳の事しか頭に無い。

数人その枠から外れる者がいるが、それらは下世話な噂話に興ずる類いでは無かった筈。また、望まれもしないのに知識をひけらかす様な者もいない。

オレが片鱗さえ覗かせなければ、彼女はずっと、この無防備な笑顔を見せてくれるだろう。…そう、油断していた。軽く考えていたのだ。

この結果がこれだ。

「……………」

怒気を洩らしては、更に彼女を怯えさせるだけだ。

そう頭では理解していても、止められない。

誰だ。

誰がオレの大切な場所を奪おうとしている。

誰がサラサをオレから取り上げようとしているんだ…!!

「……………」

険しくなっているであろうオレの顔を、サラサはじっと見ていた。

「…………陛下。」

「……………」

静かな声が、オレを呼ぶ。

そこに怯えは感じられないが、無表情のままの彼女の心が分からない。

拒絶されるかもしれない。

…もしサラサから明確な拒絶を受けたのなら、オレは一体どうするのだろう。

そう、身構えていたオレに、サラサは、ゆっくりと頭を下げ、

「…おかえりなさいませ。」

そう、告げた。

予想もしていない言葉に、一瞬何を言われたのか理解出来ず啞然となるオレを見て、サラサは何時も通りの愛らしい笑顔を浮かべた。

安堵に体から、力が抜けそうになった。

詰めていた息を吐き出し、深く吸い込む。情けなく顔が歪むのを止められない。

なにが軍神だ。なにが死神だ。

たった一人の少女に嫌われる事を怖れる男が、神になどなれる筈が無い。

「……………ただいま。」

失わずに済んだ幸福を確かめる様に、彼女の肩口に頭を凭れると、彼女は穏やかな笑みを向けてくれた。

しかし次の瞬間、オレは再び固まる事となる。花びらの様な唇がこ

ぼした発言によって。

「お疲れでしょう…膝枕、如何ですか？旦那様。」

「……………は？」

顔をあげ凝視するオレを見ながら、彼女は柔らかかそうな膝をポンポン、と叩く。

膝枕…も衝撃的だが、彼女の口から今、旦那様と…

「……………」

だらしなく緩みそうになる口を隠し、顔を背ける。  
ただでさえ情けない顔ばかりみせているのに、これ以上は嫌だ。

チラリと窺うように彼女を見ると、不思議そうな顔で彼女は、『お嫌でしたか？』と小首を傾げる。

…嫌な訳が無い。寧ろ、とても嬉しい。

「…嬉しいよ。……………だが、その…照れる。」

「膝枕がですか？」

キョトンと目を瞠る彼女に苦笑を向けながら、オレは申し出に甘える様に彼女の柔らかな膝に頭をのせた。

「膝枕もだが……旦那様、というのが。」

正直に答えると、何を今更、といったげな瞳が返される。

雄弁な瞳を愛しく思いながら、そっとサラサの頬に手を伸ばせば、今度は拒まれなかった。

スリ、と猫の子の様に擦り寄る様が可愛い。

「……照れる……が、……嬉しいものだな。」

「……そうですか。」

穏やかな微笑を浮かべ、幼子にする様にオレの髪を梳く彼女に、胸が暖かくなる。

サラサ……オレの事など、なにも知るな。

どうか何も知らないまま、ずっとオレに微笑んでいてくれ。

オレは、祈るよつに、そう思った。

.

## 側室（仮）の報告。

キィ…、

先日の様に、書庫の扉を潜った。

今日の天気は薄曇りな為、室内はこの前より薄暗かった。少し湿気も感じる。

本に湿気は大敵ですが、この世界では何か対策を講じているんじゃないか、と関係無い事を考えながら奥へと進んだ。

カタン、

予想通りその方は、この間と同じ場所にいた。

本棚の前に立ち、分厚い本に視線を落とす横顔は、とても綺麗です。

伏し目がちの瞳に影を落とす長い睫毛。彫りの深い目鼻立ちに、手触りの良さそうな肌理の細かい象牙色の肌。

元の私の世界のモンゴロイドの特徴を持ちつつも、欧米系の顔立ちともいいまじょうか。

…あ、ちなみにシャロン様は、完全にコーカソイドですね。この世界に人種の括りがあるかは分かりませんが。

「……この前の話の続きをしにきたのかしら？」

「！」

ぼんやりと私が見つめていると、美人さんは此方を見ずにそう言った。  
パターン、と手元の本を閉じる。

どうやらとつくに、気付かれていたようです。

高い場所から私を見下ろす美人さんは、面白がる様子は見受けられません。  
静かな瞳はただ、じっと私の出方を待っています。

「……はい。」

私は真っ直ぐに美人さんを見据え、はつきりと頷いた。

「……………」

本を棚に戻し、美人さんは靴音を鳴らし階段を降りてくる。

…カツン、

私の前に立った美人さんは、腕を組み、私に視線を合わせた。

「……………それで？恨み言なら聞かないわよ。知りたいと言ったのは、貴方。」

「……………?」

報告をしようと思った私は、思ってもみなかった事を言われ、首を傾げた。

…恨み言？

なにを恨むのでしょうか。確かに知りたいと言ったのは私で、美人さんは教えて下さっただけです。

それに美人さんが教えてくれなくとも、私は知る事になったでしょう。私は此処へ歴史書を探しにきたのですから。

寧ろ分かりやすく説明して下さいに、お礼を言うべきでしょう。

うん、そうです。

「…教えて下さって、ありがとうございました。」

「…っ、」

あれ？この前もこんな事があつた気が…デジャヴ？

頭を下げ、そんな事を考えていると、息を飲む音がした。

顔を上げると、美人さんは困惑した顔をしていました。大人っぽい美女なのに、頼りなげなその表情は、迷い子の様です。

「……何故？」

「……はい？」

突然、何故？と言われても困りますね…何のお話でしょう。

「…知らなければ良かったとは思わないの？」

「…思いません。」

「……即答ね。」

美人さんは、苦く笑む。でも歪んだその笑みは、私を嘲笑うというよりは、自分に向けた…そう、自嘲に見えました。

「…好きな人の事です。例えどんな内容でも、知らないよりは知っていた方がいい。」

「知らない方が幸せ、という事も、世の中には沢山あるわ。」

「…そう、ですね。…それはあります。でも、コレは違う。これは、知らなければいけない事なのです。」

どう伝えたら、上手く伝わるのかは分かりません。

ですが私は、まとまらない思考のまま、懸命に言葉を紡いだ。

「知らないまま陛下を慕っている方が楽です。幸せです。…ですがそれでは、きつと歪む。」

耳を塞ぎ、目を背けていては、私はきつと大切な方さえ見失ってしまうでしょう。

そんな私じゃあ、あの方は護れないのです。

「私は胸を張って、あの方を好きだと言いたい。…それだけです。」

「……………」

美人さんは、拙い私の言葉を最後まで聞いて下さいました。

……よく考えなくとも、随分恥ずかしい事を言ってしまったね。

今更照れ臭くなって、じっと見つめてくる瞳に、私はヘラリと笑いかけた。

「…以上、報告でした。」

「……………報告？」

美人さんは、私の言葉を不思議そうに繰り返す。  
パチパチと瞬く仕草が可愛らしいです。

「…美人さん、言ってらしたじゃないですか。好奇心で知識欲だつて。」

「……………貴方、」

長い沈黙の後、美人さんはフハツ、と吹き出した。…クールな美人が、……台無しにならないところが凄いな…。

爆笑していた美人さんは、笑いすぎて滲んだ涙を拭いながら、私に向けてこう言った。

「…本当に、変な子ね。」と。

## 側室（仮）の交流。

「…え、えと…その……ご一緒に、お茶でもいかがでしょうか？」  
「……………」

扉を開けた格好のまま、私は数秒固まった。

…固まるでしょう。固まりますとも。こんな、私の妄想を具現化したのではないのでしょうか？と言いたくなる様な可愛らしい子がおりましたら。

朝食のおかわりまでしたのに、また夢の世界に迷い込んでしまったのかと思いました。

ああもう…顔を真っ赤にして、そんなプルプル震えて…何処の天使様が迷い込んだのかと…。

あまりのシャロン様の愛らしさに、私がつつとりと見惚れていると、シャロン様は何を勘違いしたのか慌てました。

「……やはり、直接お誘いするのは…失礼ですよ、ね……」ごめんな  
な…」

「シャロン様。」

「…は、はい…?」

慌てたかと思えば、シヨボンと俯くシャロン様を、私は真顔で遮つ  
た。

「抱き締めてもいいですか?」

「……………え、……………え??」

「ぎゅっつとしてもいいですか。いいですよね。」

「…ええっ?は、」

答えを聞かずに、私はシャロン様をきゅっつ、と抱き締めた。

シャロン様が真っ赤になってワタワタしているのを見て、少し反省  
しました…だが後悔は無い。

だって超いい匂いする…!!柔らかい…髪サラサラ…いつも思  
いますが、私シャロン様といると、越えてはいけない壁を乗り越えそ

うになります。

おっとこの位にしておかなければ衛兵を呼ばれてしまいますね。

少し残念に思いつつも、そっと離すと、シャロン様はリンゴの様に真っ赤な顔で私を見ていた。

「申し訳ありません。…シャロン様が、凄く可愛らしかったので。」

「……わ、わたくしが、ですか…？…そんな事、」

戸惑った様な照れ顔もまたキュート…！！

一頻り、そんなシャロン様を愛で満足していると、少し落ち着いたシャロン様は、

俯き加減で視線を彷徨わせながらも、最後にとんでもない爆弾を投げつけてきた。

「……ですが、…その、嬉しかったです…。」

「……………！！！」

……吐血しなかった私を誰か誉めて下さい。

「…本当に、私も一緒にしてもよろしいんでしょうか？」

書庫の前に辿り着いた私が、扉に手をかけると、シャロン様は不安そうに私を見た。

一緒にお茶をしましょう、とのシャロン様の誘いに即座に頷きたかった私ですが、先約があるのでそうも行きません。

ですが、折角勇気を振り絞り私を誘いに来て下さったシャロン様とこのまま別れるのも寂しい…なら、一緒に書庫へ行きませんか、と誘ったのでした。

「大丈夫。美人さん…アヤネ様はお優しい方ですから。」

そうそう。

先日漸く、美人さんと互いに自己紹介をする事が出来ました。テンパって名乗り忘れていたのです…なんたる事。

「本にのめり込むと、たまに存在自体忘れ去られたりもしますし、興味を持った事には突進しがちですが、基本的に…」

基本的には面倒見の良い方で、とても素敵な女性ですよ。

そう締めくくる筈だった私は、言葉をそこで飲み込む。

いつの間にか開いていた扉から伸びた手が、後ろから私に絡み付いたからだ。

しなやかな指先が、私の頬を両側から押さえる。

「…余計な口をきくのは…この口かしら？」

「……………」

冷やかな笑みを浮かべるアヤネ様に、私は内心冷や汗たらたら。

…「」、誤解です。

フニフニと両頬を押された不細工な顔で私が、あうあうと混乱していると、腕にぎゅっつと何かがしがみ付いた。

「……あら。」

美人さんはキョトンと目を瞞った後、にんまりと意地悪な笑みを浮かべた。

その視線を辿ると、私の腕に抱き付いていたのは…シャロン様でした。

ビクビクと震えながらも、私の腕を掴んでいるのは、もしや庇ってくれているのでしょうか…!?

か、…可愛い…!!

「今日は可愛らしい子猫が張り付いてるわね。何処から攫ってきたの？」

…すっかり面白がってますね。アヤネ様。

楽しそうなところ申し訳ありませんが、訂正させていただきますよ。

「シャロン様は猫じゃなく小鳥さんです。可憐で綺麗で繊細な小鳥さんなのですよ!」

胸を張って宣言した私を、アヤネ様は、とても残念なものを見る目で見た。

「…訂正するところは其処なの。」

……え。他に何処が？

「…はい、火傷しないようにね。」

アヤネ様はそう注意を促しながら、白い陶器のカップを私とシャロン様の前に置いた。

取り敢えずお茶にしましょう。とアヤネ様が連れてきてくれたのは、書庫に隣接する部屋だった。

元々談話室として設けられていたのか、小綺麗な其処にはアヤネ様が持参したと思わしきお茶セットと茶菓子が置いてある。その隣に丁寧に積み上げられた本があるあたり…実は書庫の又シだったりしますか、アヤネ様。

「ありがとうございます。」

お礼を言っ て私がお茶を飲むと、シャロン様も、慌ててお礼を言っ ていた。

書庫に来るのが初めてらしいシャロン様は、何処を見ても興味津々で可愛い。

おどおどしながらも瞳を輝かせる様が、微笑ましいです。こんな妹欲しかったなあ…。

「…こぼれるわよ。」

「へ。…あわわっ、」

シャロン様を愛でていたら、手元が疎かになっていたらしい。呆れを隠しもしない口調でアヤネ様に注意され、私は慌ててカップを持ち直した。

…姉気分に、十秒すらも浸れませんでした。流石、私。期待を裏切らない粗忽者っぷり。

「…ところで、そちらはレダの王女様よね。貴方の交友関係はどうなっているのかしら？」

「…えーと。」

「……………し、シャロン・ロッド・ダリアと申しますっ。」

私が何と返そうかと悩んでいる間に、テンパリ気味のシャロン様が頭を下げた。

私相手だと『知ってるわ』とバツサリ切り捨てそんなアヤネ様は、  
シャロン様にニッコリと笑む。

「「丁寧にありがとうございます。私はアヤネ・サイリと申します。」

「私はサラサ・トウマと申し……」

「知ってるわ。」

「……………」

「……なんか仲間外れで寂しかったので、さりげなく混ぜってみたら、  
案の定バツサリと切り捨てられました。」

流石、アヤネ様。突っ込みの切れ味半端無い。

……では無くて。

「シャロン様とは、つい最近お友達になりました。……といいますが、  
待ち伏せして、仲良くなってもらいました。」

「……………何をしているのよ。貴方は。」

ぶつちやけてみたら、アヤネ様は、がっくりと肩を落とした。本当に、残念な子ね…と言わんばかりの視線が刺さります。

「…わたくしを、待っていて下さったんですか？偶然ではなくて。」

……う。

キョトンと瞪られたシャロン様の目が痛い。

すみません…純真無垢な乙女を待ち伏せなんてして。

「……ごめんなさい、シャロン様。……怒ってます？」

「いいえっ！…ですが、何故そのような事を…？」

シャロン様のもっともな問いに、アヤネ様の視線も私へと向けられた。

私は悩みつつも、事の成り行きを説明する事にしました。

…別に隠す様な事じゃありませんね。少なくとも、この二人には。

陛下を好きになった事や、あの方の為に何かしたいと思った事、

それから、後宮の皆に仲良くしてもらいたいと思った経緯を、掻い摘んで説明した。

二人は、とても驚いていました。シャロン様は大きな目が更に大きく。

アヤネ様は、呆れとも驚嘆ともつかない顔で、ため息をついた。

「…貴方の一途さには恐れ入るけれど……それは中々無謀な話よ。」

「はい。」

私は苦笑を返すしかありませんでした。

確かに、誰が見ても無謀な事です。

側室の方々は、単純に相性の問題だけで仲違いしている訳ではありません。其処にはどろどろとした政治の問題すら絡んで来るでしょう。

後宮入りした理由も様々で、

私やアヤネ様はたぶん、父の出世の為で、

シャロン様は、藩属国の王女様ですから、人質…とまではいきませんが、牽制の意味合いがあるんでしょうね。

他の方々も、それぞれに背負っているものがある、きっと。

「…で、ですが…とても素敵なお事だと思います…!」

「…シャロン様。」

シャロン様は、真っ直ぐに私を見つめ、懸命に訴えた。

「話し掛けていただいて、私が嬉しかった様に、…他にもいらっしゃるかもしれません。仲良くしたいと思っている方が。」

わたくしにも、協力させて下さい。

強い瞳で、シャロン様はそう言った。

懸命な言葉に、胸が暖かくなる。…なんて良い子なんでしょう。

じーんと私が感動していると、向かいの席からため息が聞こえた。

顔を向けると、理知的な美貌に、苦笑いを浮かべたアヤネ様と目が合う。

「…しょうがない子ねえ。」

「……アヤネ様？」

「…貴方達だけじゃ、どんな危険な事になるか分からないわ。…お姉さんも、一緒に考えてあげる。」

「…！」

悪戯っぽくウインクして見せたアヤネ様は、とても優しく微笑んでくれた。

私は嬉しくなって立ち上がり、二人に向かって勢いよく頭を下げる。

「…よろしくお願いします！」

…なんて私は幸せ者なんだろう。

無茶無謀な計画に付き合っ下さる大切な仲間が、二人もできました。

「今日のご衣装は、とても素敵なお色合いね。何処の染め物かしら？」

「父が西国から取り寄せて下さった布で仕立てましたの。何でも、一流の染め師が…」

まあ、おほほ…、と。

延々と続く興味の無い話題に表面上だけ合わせる様に、私は引きつる顔で笑った。

…何ですか、この苦行は。

…私がこんな精神的苦行をつまされているには、訳があります。

説明する為には、少しだけ時間を遡りましょう。

「先ずは敵を知る事が大事よね。」

アヤネ様は優美な仕草で足を組み換えながら、そう言った。

て、敵ではありませんよ。言いたい事は分かりますが。

一致団結した私達はその後、お茶をしつつアヤネ様に色々な事を教えてもらっております。

簡単に各国の情勢から、鴻国の現状など、

そして側室の方々のお話を聞いている時に、アヤネ様はそう切り出したのです。

「…知るって言っても、…どうやって、ですか？」

おずおずと訊ねたシャロン様に、アヤネ様はニッコリと笑んだ。

「実は私、お茶会に誘われているの。…いつもなら面倒だから、適当な理由をつけて断ってしまうのだけれど…」

っ、つまり

「…それに参加しよう、って事ですか？」

「そう。」

「うわー…。」

「ついに来ました！お茶会！」

「小説などでは、後宮のお茶会＝女の洗礼、戦いの場として書かれています。ですが、実際はどうなんでしょう？」

「…ドキドキしますねー！シャロン様…あれ？」

「……………」

「好奇心半分、怖いもの見たさ半分…あれ怯えはどうしたよ？な私が興奮気味にシャロン様を見ると、シャロン様は…ピルピル震えておりました。」

「か、顔が蒼白いです！」

「シャロン様っ？どうなさいました？」

「……………わ、わたくし……………」

「忘れておりました…小鳥さん……………いえ、シャロン様は私と違って繊

細な方。

女同士の戦いの場に、勇んで赴ける様な方ではありません。

「ごめんなさい、シャロン様を無理矢理参加なんてさせませんから、安心して下さい！」

「……サラサ、様……」

シャロン様は、私を上目遣いで見ながら、キユ、と服の裾を掴んだ。ゴハア、と血を吐いて萌え死にそうになった私は、そろそろ側室（飯）とすら名乗るのを止めた方がいい気がします……。

挙動不審になりながらもシャロン様を宥めていると、何故か思い詰めた様に俯いたシャロン様は、暫し間を置いてから、

決意した目で、私を見た。

「……大丈夫、です。わたくし、やれます。」

「……シャロン様、ご無理は……」

「いいえ。……サラサ様と一緒にいてくださるなら……わたくし、頑張れます。」

「衛生兵……！」

「…………えっ？」

しまった叫びが口から洩れました！ですがもういい！！（潔い）

誰が私の鼻血と私を止めて下さい！

本当、なんて可愛いんでしょう…私の天使！マジ天使！！

「…きゃっ、…サ、サラサ様？」

遠慮無くぎゅっと抱き締めると、可愛らしい悲鳴が洩れた。顔を赤く染めてワタワタするシャロン様に頬擦りまでしてしまった…。

140

「…私も、シャロン様と一緒にだと幸せです。頑張れます。」

「…………ほ、本当、ですか？」

「勿論。」

「………………。」

ぎゅっぎゅっ抱き締め合っていると、向かいの席に座るアヤネ様から、大層冷たい視線をいただきました。

呆れを隠しもしない半目で私達を見ながら、ため息をついたアヤネ様は、たっぷり間をあけてこう言った。

「……盛り上がっている所悪いけど、シャロン様はお連れ出来ないわよ。」

「……………」

……………えっ？マジですか。

「人数が多くなるのも問題だけれど、それ以前に、シャロン様は目立ちすぎるわ。」

「……………わたくしが、王女だからでしょうか？」

「そう。……私が招待されたお茶会に同伴していくという事は、私の取り巻きと判断される可能性が高いわ。……シャロン様は、ご自身は控え目な方だけれど、肩書きがね。」

「……………」

成る程。確かにアヤネ様の懸念は最もです。

……捨て犬の様な目で、しょぼんとしてしまったシャロン様を置いていくのは忍びないですが……………うう……………本当、辛いですが。

お土産持って帰りますからねー。

……って、無いんですか？お土産。

.

そんな経緯を経て、私は今此処におります。回想終了。

「…まあ、そうなんですの。」

「おほほ…」

「そういえば、お聞きになりました？先月ご結婚なされたカナイ家のご令嬢が…」

「おほほほ…」

「本当ですか？…まあ、恐ろしい。」

「おほほほほ……痛っ！！」

「………？」

「…お、おほほ」

興味無さ過ぎる話題に飽きた私が、ただひたすらに、壊れた機械の様に笑っていたら、見かねたアヤネ様にテーブルの下で足を踏まれた。…サーセン姐さん。

痛みに呻いている私に、一瞬視線が集まりましたが、適当に笑っていると、またも存在が空気に戻る。地味メイク万歳。

元々私って、平凡な顔立ちの地味子なので、頑張って気配消さずとも存在薄いんですけどね。

目立たない為にも、衣装も化粧も地味めにしましょうと言ったら、アヤネ様とシャロン様は、何故か残念そうだった。

本当は、華やかな色が似合うとか誉めて下さるのは嬉しかったのですが、誉められ慣れてないので、むず痒くて仕方なかったです。

特にアヤネ様は、『後で改めて、着せ替えしましょうね。貴方は化粧映えもするわ、絶対。』と大変良い笑顔でおっしゃってました。…少し寒気がしたのは気のせいでしょう。

………ところで、お茶会というのは私の想像と少し違いました。結構平和というか…奥様の井戸端会議といますか。まだ女の冷戦、嫌味合戦は繰り広げられてません。

………あくまでも、『まだ』ですが。

私が相変わらず一步引いた場所で傍観していると、一人の美少女が何かを思い出したと言わんばかりに、『そういえば、』と話を切り出した。

「ホノカ様のお父様、安璃州あらしゅうに異動なされるとお聞きしたのだけれど。

「っ！」

彼女の言葉にホノカ様は息を詰めた。

ホノカ様は、癒し系なほわほわ美人さんです。シャロン様の様に目を引く華やかさは無いけれど、少し垂れ目がちなところと、ぼつてりした唇がチャーミング。

憧れの隣のお姉さんの魅力とでもいいでしょうか……。え？分かって辛い？？

「州牧補佐となられるんでしょう？ご栄転おめでとうございます。」

ニッコリとお手本の様な笑みを張り付けるのは、ルリカ様。シャロン様とお年は同じ位ですが、真逆なタイプですね。

ルリカ様は、勝ち気な美少女です。ばっかじゃないの！とは非罵って頂きたい感じ。……え？変態臭い？？

「……………あり、がとうございます。」

ルリカ様の言葉に、ホノカ様は唇を噛み締めた後、俯く。  
その様子は、喜んでいる様には見えなかった。

「……………?」

私は話についていけなくて、戸惑ってしまったが、改めて言葉の意味を考えてみた。

…確か、安璃州というのは、西の方にある小さな州だった筈。で、  
州牧ほくというのは、県知事ほくみたいな地位、でしたよね？

その補佐…というのが、どの程度の地位かは分かりませんが、ホノカ様の反応を見ると、……………もしかや左遷なのでしょうか。

「安璃州でしたら、西国の『マトリ』との境の州ですわ。お取り寄せしていただかなくても手に入りますわね。…羨ましいわ。」

「……………。」

おほほほ、と甲高い笑い声が響く。それに耐える様に、ホノカ様は益々俯いていた。

…左遷決定ですね。

ルリカ様とお取り巻きの連携プレーが凄い。そして怖い。

確かルリカ様のお父上は、吏部りぶ：つまり人事部のお偉いさんだと教えてもらいました。

つまり人事部長の娘が、地方にとばされた方の娘さんを笑い者にしている、と。

……世界が変わっても、こーゆーのは大差ないものなのですね。

私もやられましたよ。同級生に、父の同僚の娘さんがおりまして、転勤の際に、今のルリカ様のセリフをいただきました。

ニツコリ笑って、『白い人』食べ放題です。と返しておきました  
が。

父は今も、北の大地で遅しく単身赴任生活を頑張っているでしょう。  
次は『萩の』がいいです。と言って泣かれたのは蛇足です。

「ご立派なお父様ですわね。」

「そうですね。州牧補佐なんて。」

「……………」

重なる高笑い。身を縮めるホノカ様。

隣にいるアヤネ様の目が、スウ、と細められた。  
侮蔑を隠さない彼女の視線に、お嬢様達は気付きもしない。

アヤネ様…綺麗なお顔が迫力満点ですよ。

……まあ、お気持ちは良く分かりますが。

ねえ、お嬢様方。

働いているのは、貴方じゃない。私でも無い。

「…本当に、ご立派です。」

突然会話に参加した私に、皆の視線が集まる。

アヤネ様だけは、諷める様な視線でしたが、他の方は驚いていらっ  
しゃる様です。

ですが、私が同意した事で、ルリカ様達は味方…というか、私が長  
いものに巻かれた様に見えるらしい。

ニンマリ、と満足そうにルリカ様は笑んだ。

「…そうでしょうか？州牧補佐…しかも安璃州のなんて…」

「凄いです。西国との国境の州でしょう?...責任重大です。」

「...え?」

ルリカ様の吊り上がった猫の様な瞳が、睜られる。

私の言葉の意味を、計りかねる様に。

「西国とは、最近輸出入が増えたと聞きます。これから安璃州は、商業の要となるやもしれません。」

前もって勉強会で教えていただいた知識では、織物等だけで無く鉱石も輸入しているらしい。

今の所友好関係にあるので、商業の要、と言ったけれど、その関係がどう変わるかによって、軍事的な意味合いも含んでくるでしょう。

「...そんな場所に派遣されるなんて、とても信頼されていらっしやるんですね。」

「...っ!」

ルリカ様は、一瞬呆気にとられた後、ギッ、と私を睨み付け、ホノカ様は、泣きそうに顔を歪めた。

…父に仙台行きをすすめ、泣かせた私が言えた義理ではありませんが、

頑張って働いて下さっている方を、貶めるのはいけませんよ。

## 側室（仮）の指導。

「……………反省しているの？」

「……………はい。」

アヤネ様は腕組したまま、床に正座した私を見下ろす。古今東西…  
いや異世界ですが、反省させる時の格好は変わらないんですね。

「本当に？」

「そりゃもう！地の底よりも深く。」

「……………貴方のその物言いが、真剣さを削ぐって、そろそろ理解して  
ちようだい。」

ハア、とアヤネ様は深いため息をついた。

マ、マジですか。

私なりの精一杯の表現が逆効果だなんて…！

……………と、いいですか姐さん…あ、足がそろそろ限界なんです…。

痺れ過ぎて、足がついているかさえ認識出来なくなってまいりました。

「……あ、あの……もうその辺で……」

後ろで成り行きを見守っていたシャロン様が、おずおずとアヤネ様に言ってくれた。

流石わたしの天使……!!お土産無くてごめんなさい……!!

「……シャロン様はこの子を甘やかしすぎです。」

「ですが……反省してらっしゃる様ですし……」

「……ぬるいです。そんな甘やかすから、こんな後先考えない子になるんですよ?」

……あつね。私、元の世界でもこんな場面に遭遇した事がある気がしますね……。

というより、父と母に置き換えてみると日常茶飯事でした。ただ叱るのが母で庇うのが父でしたが。

ごめんなさい父さん。とばかりでお小遣いを減らされた埋め合わせはいつか必ず……まあ帰れたらになります。

「こんな危機感が無いままじゃ、いつか絶対危ない目にあります。それからでは遅いのですよ?」

「…さ、サラサ様が危険な目に…?」

「ええ。それは嫌でしょう?」

「当然ですっ! ……そうですか……それ、なら…」

「分かって下さいましたか。」

……………あれ。

父を懐かしんでいたら、何かいつの間にか味方が消えました。アヤネ母さん交渉スキルパネエ…。

「…さあ、味方はいなくなっただわよ?」

「……………。」

あ、姐さん、イイ笑顔過ぎて怖いです…!!

ワキワキと指を動かしながらアヤネ様は、私へと近付いてくる。

い、いやぁー!! 勘弁して下さいませお代官様ー!!

「…ち、ちよ……………っ！…！！！」

ツツー…と、アヤネ様は痺れた私の足を辿る。感覚が無くなる程痺れた足にそんな事をされたらどうなるか…経験のある皆様にはお分かりでしようとも。

「この辺はどっ…」

「ひゃあ……………っ！…！！！」

「ほら、どっかしらっ…」

「や、やめ…っ！…！」

私は余りの衝撃に、息を止めて団子虫の如く身を丸くして耐えるしかなかった…。変な声が出るのは許して下さい…。

「…本当に懲りたわね？」

「……………ひゃい。」

一通り私を虐めて気が済んだのか、漸くアヤネ様は正座をといてく  
れました。

…うう…足がプルプルする…。

生まれたての子山羊の様になりながらも椅子に座る。…隣を見ると、  
何故かシャロン様が真つ赤な顔をしていました。

…目を合わせてくれないのは何故ですか？？

「…とにかく、」

いつもの書庫の定位置、私の向かいの席に座ったアヤネ様は、私を  
見る。

「あまり無茶はしないでちょうだい。今回の事で貴方は確実に、ル  
リカ様に目をつけられてしまったわ。」

「…はい。…ごめんなさい。」

アヤネ様の目は、純粹に私を心配して下さっていました。  
申し訳なさに、少し俯いて謝罪すると、

しなやかな長い指が、私の頬をスルリと撫でる。

「…本当に、お馬鹿ね。人の事で怒るなんて。」

ムニ、と私の頬を押したアヤネ様は、言葉と裏腹に怒ってはいないようです。

慈しむ様な目は、お母さんが私を叱った後に見せてくれるものと似ていて…照れくさいのと同時に、………少し、ほんの少しだけ、寂しくなりました。…まあ、ウチの遅いお母さんは絶対元気でやっているでしょうが。

## 側室（仮）の不安。

ドンッ、

「……………」

勢いよく突き飛ばされた私は、なんとか踏み止まり無様に転がる事を免れました。

転ばなかった私に、舌打ちをしたお嬢様は、盛大に顔を歪める。

……………お顔が般若みたいになってますよー。

「あら、ごめんなさい。…目立たないからぶつかってしまったわ。」

ハン、と鼻で哂いながら見下した視線を下さるのは…やはりルリカ様でした。

…嫌がらせにひねりが無いなあ、なんて事を考えながらも私はニッコリ笑む。

「大丈夫です。ルリカ様こそ、お怪我はありませんか？」

「…っ、……………ありませんわっ！」

私が平然と返すと、ルリカ様は元々吊り上がり気味の<sup>まなじり</sup>眦を更に吊り上げる。

顔に、『ばっかじゃないの!!』の書いてありますが、是非声に出して言っていたきたい。

「…行きましょう!」

全く堪えた様子の無い私に、ルリカ様は苛立ちを募らせ、足音荒く立ち去って行った。

「……………ふう、」

小さくなっていく背中を見送って、私は長く息を吐いた。

あれから、小さな嫌がらせが多発しております。

…まあ、本当に小さな嫌がらせなんですけどね。

こうやって出会い頭にぶつかられたり、聞こえよがしに悪口を言われたり、部屋の前にゴミが置いてあったりとか。中学生か。

こんな事くらいで私の何を挫こうというのですか。言っときますが私、相当図太いですよ。

「…あの、」

「？」

仁王立ちしていた私に、後ろから控え目な声がかけられました。

振り返ると其処にいたのは…

「…ホノカ様。」

フワフワの赤毛と、目尻が下がった柔らかかな翠の瞳。癒し系美女、ホノカ様です。

「…ごめんなさい。私のせいで。」

「いいえ。」

申し訳なさそうなホノカ様は、多分今のやり取りを見ていたのだろう。

私は首を振って苦笑した。

「ホノカ様のせいではありませんよ。私の子供だったんです。」

「そんな事…貴方は私を庇って下さっただけではありませんか。」

「やり方がまずかったんです。…もう少し穏便な方法もあつたんでしようし。」

声高に正義を叫ぶだけで争いが無くなるなら、誰も苦勞はしません。私がするべきなのは、ルリカ様のプライドをへし折る事では無く、皆様の溝を埋める事です。

それが現段階では難しくとも、あの席では話をやりわり逸らすなり、何か方法があつた筈。

…本当に、私はまだまだです。

「…そんな事ありませんっ！」

「っ?」

突然、声を荒げたホノカ様に、私はビクッと肩を竦めた。

ど、どうなさつたんでしよう。

「サラサ様は、何も悪くありません！人を貶めるルリカ様が悪いのです…!!」

「…ほ、ホノカ様？」

激昂したホノカ様を、私は啞然と見ている事しか出来なかった。

きつと積みもり積もったものがあるのでしょうか、それにしても…。

「あの方もあの方のお父上も、人を見下してばかり…！権力を振りかざすあの方々に、どれ程の方が涙を飲んだ事か！」

「ほ、ホノカ様！お声が大きいです！」

ヒートアップしてきたホノカ様の声が、だんだんと大きくなってきたので、私は慌てて止めた。

こんな、何処に目や耳があるか分からない場所で危うすぎます。

「…あ、…ごめんなさい。」

ホノカ様は、我に返ったのか、頂垂れた。

そしてペコペコ頭を下げながら、ホノカ様は去っていったのですが…

なにやら多方面から恨まれている様子ですね…ルリカ様親子は…

不穏な何かを感じながら、暗雲が立ち込める空を私が仰いだ日から、  
数日後の話です。

後宮に、何者かが忍び込んだらしい、との情報が流れました。

「不審者って…どなたか目撃したのかしら？」

お風呂から上がり、カンナに香油を塗られながら、私は聞いてみた。詳しくはまだ教えてもらってはいないけれど、後宮に侵入した何者かがいたらしい。

私を含め側室の方々は、自室で大人しくしているように言い渡されております。

後宮の入り口には増員された衛兵の方々が厳重に警備し、中も女性の兵士さんが見回りをしていて、何やらとても物々しい雰囲気ですね。

「なんでも、エイリ家の侍女の方が目撃なさったそうですよ。不審な人影を目撃して衛兵を呼んだそうですが間に合わず逃げられてしまったそうです。」

カンナは手を止めずに、私の問いに答えてくれた。

エイリ家というと、ルリカ様のところですね。

「……………」

肌や髪の手入れを終え、カンナにお礼を言って私は立ち上がった。

「…何が、目的なんでしょうね。」

ポツリ、と呟く。

私のまわりはとても平和だったので、いまいち実感出来ておりませんでした。数年前まで戦争をしていた国です。敗戦国の残党…もしくは他国のスパイの可能性もあるのでしょうか。

ただ、危険を冒してまで侵入する程のメリットが、後宮にあるのでしょうか。

まだ現皇帝陛下には、正室…お后様がいらっしやいません。

15人いる側室の中の一人二人攫ったところで、身代金がとれる程度ですかね。国家機密を一介の側室が知る筈ありませんし。

「……………」

カンナが退室したので、寝室に行きベッドに仰向けになって、天井を眺めながら私はまだ悶々と考えていた。

…恨み、でしょうか。

皇帝陛下には手が出せないから、側室を攫って見せしめに殺す…とか？

…でもそれも、正室…もしくは寵妃くらいでなければ、インパクト的には薄いですね。

……… 本当に、何が目的なんでしょう。

こんな状況じゃ、ホノカ様達の問題を解決するどころか、シャロン様やアヤネ様に会えません。

……… お二人は、大丈夫でしょうか。

シャロン様はともか弱いし、アヤネ様はしっかりしているけれど、武術の心得なんてないでしょうし…完全に頭脳労働タイプですから。

「……………心配です。」

後、陛下はご無事でしょうか。

きっと今頃お仕事に追われているのでしょうかね。この問題を含め。

ただでさえ、戦争の爪痕の残る国を導き治めるのは、想像もつかな

い位、大変な事でしょう。それなのに、また問題が起こるなんて。

あの方のお体が心配です。

……ああ、でも、お仕事に追われている位でいいのかもしれない。いつまた侵入者が来るか分からない後宮になんて、来ないで欲しい。

此処は貴方にとって、ゆっくり、安らげる場所であって欲しいのです。

「……………早く、問題が解決してくれるといいのに。」

それまでは、寂しいですがペットはペットらしく、ご主人様の帰りを待っています。

…あんまり捕まらないようなら、大人しくもしてられないかもしれないかもしれませんが。

不穏な事を考えつつも、私は寝台脇に置いた灯籠の灯を消そうとしました。

…その時です。

ガタンツ、

「…っ!？」

大きな物音がしました。

私は咄嗟に、武器になるものを探し、テーブル上の盆を引っ掴んだ。

ガタ、バンツ

荒々しい音をたてて、踏み込んで来る誰か。…侵入者にしては堂々としすぎている。

頭の隅で疑問を感じつつも、お盆を構えていると、

バンツ、と荒々しく扉が開き、

「…サラサ!！」

「…へ、陛下っ?」

室内に入ってきたのは、私の大切な旦那様でした。

.

側室（仮）の喧嘩。

「陛下っ？」

何故、此処に！

驚愕に固まる私に駆け寄った陛下は、そのまま私を抱き締めた。

「無事か…サラサ。」

何時もと違って加減無く私を抱き締める腕は、痛いくらい。腕の中に私を隠そうとする様に抱え込んだ陛下は、私の無事を確認しているのか、背や首の辺りを擦る。

何処にも怪我が無いと分かると、漸く長い安堵の息を吐き出し、腕の力を僅かに緩めた。

無事かって…私が不審者を発見した訳では無いのですが。

戸惑う私の頬を撫で、瞳を合わせた陛下は、少し疲れた様な顔をしていた。

「後宮に賊が侵入したと聞いて、すぐにでも駆け付けたかったのだが、急務の仕事が入っていてな…遅くなって、すまない。」

「そんな事っ…！」

雄々しい美貌を苦く歪める陛下に、私はかぶりを振った。

「私は無事ですし、何事ありません。…それよりも陛下…何故いらっしやったのですか…！」

「…何故とは、」

食って掛かる私に、今度は陛下が戸惑った。形の良い眉が、困惑した様にひそめられる。

「いつ何時、また賊が入るかわかりません。本日は王宮のご自分のお部屋でお休み下さい。」

「……何を言っている。」

グイ、と陛下の体を押し、腕の中から逃れる様に身を退いて陛下を真っ直ぐに見る。

陛下は、呆然としていた。

「貴方に何かあったら、どうするのです…!」

一国を背負う、替えのきかない唯一人のひと。

それは出会った当初も思っていたけれど、今は少し違う。

今、陛下が倒れたら、この国は混乱し争いが起こる。その意味でもこの方は、大切な方なのだけけれど。

私個人にとっても、替えのきかないただ一人なのです。

相馬沙羅を知る人間が、誰一人いない世界で、こうして立っているのは、貴方が居てくれるから。

貴方を好きで、大切にしたいという想いが、私を支えているからなのです。

「オレよりも、お前の方が余程心配だろう。…こんな細い腕で、襲われたら一溜まりも無い。」

それなのに貴方は、分かってくれない。

私の腕を掴み、険しい顔でそんな事を言う。

「陛下自ら護っていただかなくとも、武官の方々が見回って下さっております。」

「サラサ…ッ！」

苛立った様に、陛下の声が低くなる。

逆らってばかりで、本当、私可愛く無い。嫌われてしまつかも。

分かってる。…でも、可愛くなくていいの。貴方がいなくなる可能性が1パーセントでもある事の方が、ずっと怖い。

「15人もいる側室の一人一人の危機に、その度、大切な御身を投げ出す気ですか…！」

「…っ！」

陛下が、息を飲む音がした。

見る見る冷たい表情になっていく陛下を見つめながら、私は掌を握り締める。

「…皇帝である私は、一人の女を守る事も許されないか？」

「……………」

初めて、私の前で陛下が、自分の事を『私』と呼んだ。

それが明確に線を引かれた様で、私は泣き出しそうになる。

そんな事が許される筈も無いから、堪えるけれど。

沈黙が、落ちる。

私も陛下も、見つめ合ったまま一言もしゃべらなかつた。

本当は、伝えなければいけない言葉が、ある筈なのに。

「…………陛下。」

やがて、私ではない声が彼を呼ぶ。

見兼ねた様に割り込んで来たのは、陛下の護衛としてよくおみえになる方だった。

銀色の髪と瞳の、触れれば切れそうな美貌の持ち主は、近衛軍の大

将であり、皇帝陛下の乳母兄弟でもある方、…お名前は、確かセツナ・イノリ様。

「…至急の報告が入ったとの事。一度お戻り頂けますか。」

「……………分かった。」

それは多分、私達の為に言ってくれた事でしょう。嘘では無くとも誇張。

こんな夜更けに、皇帝陛下を起こしてまで伝えなければならぬ報告なんて、早々無いでしょうから。

無言で出て行ってしまふ背中を見送りながら、イノリ大将様に駆け寄って頭を下げる。

「…ありがとうございます。どうか、皇帝陛下をお守り下さい。」

私などに言われなくても、この方達は命懸けで護ってくれるでしょうが、それでも言わずにはおれなかった。

「……………あの方は、私などよりずっとお強いですよ。」

じっと見つめてくる銀の瞳に、私は早口で答える。

「それでも、です。」

足止めしておいて申し訳ないけれど、どうか早くあの方の元へ。

目で訴え、今にも背中を押しかねない私に、イノリ様は苦笑して身を翻し、

「確かに、承りました。」

去り際、そう私に伝えて下さった。

**將軍閣下の危惧。(前書き)**

近衛軍大将、セツナ・イノリ視点となります。

## 將軍閣下の危惧。

「後宮へ向かう！」

急ぎの仕事を鬼の形相で片付けた我が主は、そう宣言し全力疾走の勢いで執務室を飛び出した。

何時ものように、一旦自室に戻るのも惜しいのか、着替える事無く後宮へ向かう。

「お待ちを！！」

後ろ姿に叫ぶが、止まる素振りも見せない。

無駄に足が速い為、力尽くで止まらせる事も出来ず、私は舌打ちした。

せめて引き離されない様追い掛ける。

後宮に賊が侵入したとの知らせを受けた時、滅多な事では顔色を変えないこの方が、一瞬顔を強張らせた。

それは、瞬きする程度の時間だったので、私以外の誰も気付かなかった様だが。その後も、後宮の警備強化や女性兵士の増員、調査など、何時も通り迅速な対処が為されていたので、余計だ。

私も、冷静に仕事を処理するこの方を見ているうちに、その事を忘れていたのだが…

公の時間が終わった途端、脇目も振らず走りだすとは。

後宮の入り口に近付くと、衛兵達が一瞬身構えたのが分かる。猪かと言いたくなる様な勢いで突っ込んで来られれば無理は無い。

だがその猪の正体が皇帝だと分かると、慌てて剣に掛けた手を外し、礼をとった。

「門を開けよ！」

「…はっ！」

戸惑いながらも、皇帝自らの命令に背く訳も無く、扉が開けられた。

だがその間に追い付く事が出来た私は、陛下の前へと回り込む。

大抵の人間が震え上がりそうな視線が、容赦無く私に突き刺さった。

「…其処を退け。」

「…賊が未だ捕まっております。尊き御身を危険に曝す訳には参

りませぬ。」

「……馬鹿馬鹿しい。オレがどれ程の死線を潜り抜けたと思っている。」

「

吐き捨てる様に呟かれた言葉は最もだ。

この方は、まだ十代であった頃から、地獄のような戦場を駆け抜けてきた。目を覆いたくなる様な惨たらしい場面や、死を覚悟した絶望的な窮地に立ち会ったのも、一度や二度では無い。

後宮に入り込んだ数人の賊など、この方にとっては物の数では無いだろう。

だが、戦場を駆け抜けていた時と今では、違うのだ。

今のこの方は、鴻国を背負う尊き身、唯一無二の存在。

万が一にも、傷付く可能性があつてはならないのだ。

「……………其処を退け、セツナ。」

「陛下!」

闇色の瞳が、鋭く眇められる。ピリリと肌があわ立つ様な殺気が放たれ、陛下は腰に佩いた剣に手を掛けた。

「これ以上の問答は無用だ。…退かねば、無理矢理通るぞ。」

「……、」

嫌という程の本気を感じ取り、私は齒軋りしたくなる思いで、体をずらした。

…こんな場所で、しかも守護対象最上位にいる方と切り合いをするなど無意味過ぎる。

この方が生を受けて二十四年。その殆どを傍で見守ってきたが、女に執着していた事は一度も無かった。

立场上、適当に遊ぶという事は許されなかったが、あの男ぶりだ。貴族の子女は元より、高級娼婦さえも仕事を忘れ熱をあげていたというのに、陛下は冷静そのものだった。

側室を迎えても、同じ。

あまりの温度差にお嬢様方を哀れに思ったが、同時に安堵もした。

如何なる賢帝であっても、女に狂えば只の人間。寵妃の願うままに

贅を尽くし、残虐な所業を繰り返し、国を傾けた王は、何人もいる。

我が国は、その心配はなさそうだと…思っていたのだが。

一直線に駆けて行く背を追いながら、私は苦く心の中で呟く。

『サラサ・トウマ』

どうか皇帝陛下を蝕む毒であってくれるな、と。

## 將軍閣下の見解。

「サラサツ…！」

バン、と開け放たれた扉から、陛下は少女の元へ駆け寄る。

寝室に私が踏み込む訳にもいかないのです、手前の部屋で止まるが、開いたままの扉から見えた少女は、愕然としていた。

「陛下っ？」

少女の驚愕した顔には、『何故この方が此処に！？』とありありと書いてあった。

陛下の寵妃、『サラサ・トウマ』。年は確か17。父は工部の官吏。

目を瞠る様な美女では無いが、整った顔立ちの少女だ。陛下は『猫』の様だと言っていたが、確かに吊り上がり気味の大きな黒い瞳や艶のある黒髪が、毛並みの良い黒猫を彷彿とさせる。

戸惑う彼女をよそに、力強く抱き締めた陛下は『無事か…。』と深く安堵の息をついた。

本当に、他が目に入らない寵愛ぶりだ。

「後宮に賊が侵入したと聞いて、すぐにでも駆け付けたかったのだが、急務の仕事が入っていてな…遅くなって、すまない。」

「そんな事っ…！」

目の前にいても完全には安心出来ないのか、陛下は隠す様に彼女を抱え込む。

だが、唯一無二、至高の存在である皇帝陛下の寵愛を一身に受ける少女は、その事を喜び優越感に浸るどころか、憤る幼子の様に身を擦り、陛下の腕を解こうとした。

「私は無事ですし、何事ありません。…それよりも陛下…何故いらっしゃったのですか…！」

「…何故とは、」

怒り、というよりは焦燥に顔を歪める少女に、陛下は戸惑っている。

「いつ何時、また賊が入るかわかりません。本日は王宮のご自分のお部屋でお休み下さい。」

「……何を言っている。」

苛立ちを隠しきれなくなっている陛下とは逆に、私は思った。面白  
い、と。

たかだか二十年弱しか生きていない娘が、己の身可愛さに保身に走  
るでも、皇帝の寵愛を受け図に乗るでも無く、不興をかう事を覚悟  
しながらも、皇帝陛下を諫める事が出来るのか。

しかも、

「貴方に何かあったら、どうするのです…!」

その、悲痛な叫びには、陛下への愛情以外のなにも、含まれてはい  
ない様感じた。

互いが互いを想い過ぎてすれ違っている事にも気付かず、陛下はら  
しくもなく少女と本気で喧嘩をしていた。

大人げ無い事この上無いが、それ程真剣なのだろう。互いに。

…流石に少女が哀れになり、助け船を出すと、陛下は苛立った目で  
私を睨んだ。

頭を冷やして下さい。

その目で訴えると、陛下は舌打ちをして部屋から出ていった。

残されたサラサ・トウマは、気丈にも泣き崩れる事は無かった。それどころか、私に駆け寄り深々と頭を下げる。

「…ありがとうございます。どうか、皇帝陛下をお守り下さい。」

私は、目を瞠った。

この少女は、あの方の強さを知らないのか？

「……あの方は、私などよりずっとお強いですよ。」

試す様な私の言葉に、サラサ・トウマは迷い無く頷く。濁りの無い漆黒の瞳は、一瞬たりとも反らされる事はなかった。

「それでも、です。」

…本当に、面白い。

知りながらも、こんな過剰なまでにあの方の身を案じるのか。

「確かに、承りました。」

サラサ・トウマ。

この少女は、ただ愛でられ、傍にいただけの寵妃には向かなくとも、もしかしたら、それ以上の器を持っているやもしれぬな。

## 皇帝陛下の反省。

「……………ああ、クソツ……!!」

蹴散らす様な勢いで駆けてきた道を、オレは無言のまま引き返した。相当酷い面構えをしているのか、見回りの兵士や、後宮の門番らはオレを見るなり蒼褪めていた。

漸く人氣が途絶えた所で足を止め、石畳を睨み付けながら吐き捨てると、背後から腹立たしい位冷静な声が掛けられる。

「下品な言葉遣いはお止め下さい。ホウリ大師が嘆かれますよ。」

「知ったことか！お爺に何と言われ様と、所詮オレは戦しか能が無い下品で粗野な男だ。」

諫める言葉に、即座にそう返すと、呆れた様な長いため息が聞こえる。…一々腹の立つ男だな。

「…それで、その下品な罵りはどなたに向けたもので？」

呆れの中に、探る様な色が混じる。それさえも苛立たしいが、それ以上にこの鮮烈な怒りは…

「…自分に向けたものに決まっている。…サラサに向ける様なクズに成り下がったオレなど、生きている価値もないわ。」

己への怒りと羞恥。

自分がどうしようも無く、情けなかった。

「それを聞いて安心致しました。」

淡々とした声が、シレッと追い討ちをかける。

苛つき、肩越し振り返り睨み付けるが、面の様な無表情はチラとも崩れない。

「……………」

何か無性に馬鹿馬鹿しくなって、長く息を吐き出す。

一瞬白く凍り、すぐに消えて行くソレを追う様に見上げた夜空には、凍てつく様な蒼い月。

頭を冷やせと月にまで言われている様な気になり、自分の被害妄想に更に呆れる羽目となる。

目を瞑れば浮かぶのは、いつもの柔らかな笑みでは無く、泣きそうな顔で睨むサラサ。

そして、そんな顔をさせたのは、オレ。…オレなのだ。

本当は、分かっている。

セツナの言う事も、サラサが言いたい事も。

戦場に立っていた頃のオレは、皇太子だった。重要な位置であろうとも、まだ替えのきく存在。王となった今とは違う。

今オレが倒れる事となれば、国は乱れる。万が一にも、何かあってはならないのだ。

「……………」

分かっては、いても。

このもどかしさは飲み込めない。

守れる力があって、守りたい存在が手の届く場所にいるというのに  
…それさえもままならないとは。

「…王になど、なるものではないな。」

独り言の様に呟いた。

「しかしそれでは、サラサ様は別の男の奥方様となっておりますよ。」

「……お前は少々煩い。」

どうせ、辞めたいと言って辞めれるような地位では無いのだ。妄想  
くらい好きにさせると言いたい。

…しかも、他の男の隣にいるサラサを想像してしまい、無駄に苛つ  
いてしまった。

本当に、何て無様な。

オレの傲慢さと認識の甘さが、お前に言いたくない事を言わせた。

泣きそうな顔をさせた。

それなのに、受け入れてもらえなかった事に衝撃を受けて、八つ当たりをした。

嫌われて、当然だ。

…嗚呼、でもどうか、願わくは、

こんなどうしようも無い男を、見捨てないで欲しい。

「……………」

後ろから、もう一度ため息が聞こえた。

立ち尽くしたままのオレの背中に向けてセツナは、『……………ですが、』  
と、ついでの様に付け足した。

「今もし貴方が身一つで国を追われる事になっても…彼女はついて来て下さるでしょうね。」

「……………」

…もしそれが本当ならば、なんて幸せな事なのだろうか。

だが、まあ、

「サラサにそんな苦勞をさせる気は無い。」

「…なら、お仕事致しましょうか。」

不遜な態度でそう言い切ると、飄々と返された。

確かにそうだ。

此処でこんな鬱々としているなど、無駄以外の何ものでも無い。それ位ならさっさと事件を解決して、サラサに謝りに行くこと。

決意したオレは、後ろを振り返らず王宮へと歩き出す。

「…賊の逃走経路は割り出せたのか？」

「確定は現段階では出来ません。目撃証言が少な過ぎます。」

「掻き集める。それから逆賊の可能性以外にも、個人の恨みの線も洗い出せ。…目撃者である侍女の主人：エイリ家中心でな。」

「御意に。」

待っていてくれ。サラサ。

謝るから、だからどうか、

オレの知らない所で 泣かないでいて欲しい。

## 側室（仮）の動揺

「.....、」

「.....サラサ様。」

「...っ、」

控え目な呼び掛けに、私はハッと我に返った。  
箸を取り落とし、カチャンと皿が鳴る。

食事の途中で意識を飛ばしていた事に気付き、私は自嘲のため息をついた。

「...ごめんなさい、カンナ。」

心配そうな顔の彼女は、かぶりを振って否定してくれるが、何度目だと自分を罵りたい。毎度毎度カンナを心配させて...少しは成長しましょう、わたし。

「...食欲が無いようでしたら、果物など如何ですか？」

「…つづん。食べるわ！食べなきゃ元気でないもの。」

優し過ぎる事を言ってくれるカンナに、これ以上甘える訳にはいかない。それに、具合が悪い訳では無いのですから。

一日の始まりである朝食こそ、しっかり食べなくてはです！！

「無理はなさらないで下さいね？」

朝粥をモリモリと食べる私に苦笑しながらも、カンナはお茶の用意をしてくれた。

食事を終え、片付けられた食器の代わりにお茶が出される。

このお茶は、匂い的に烏龍茶に近い感じですね。

礼を言って一口飲み、そういえば、とカンナに切り出す。

「…もう部屋から出てもいいのかしら？」

昨日から部屋に軟禁状態で、そろそろ鬱憤が溜りそうです。

こんな良いお天気なのに部屋に閉じこもっていては、体が鈍るし、気分が余計塞がります。

シャロン様やアヤネ様も心配ですし。

それらがおもいきり顔に出てしまったらしく、カンナは困った様に微笑んだ。

「…出ても良いそうですが…その代わり、」

「??？」

コンコン、

言葉を僅かに濁したカンナに、私が疑問顔を向けるのと同時に、扉が鳴った。

「はい。」

こんな朝から、誰ですか。

不思議がる私と違い、カンナは分かっていたのか直ぐ様対応する。

「…、…」

入り口でカンナは誰かと会話しているのだが、角度的に誰と話しているのが見えないし、会話の内容も聞こえない。

「…サラサ様。」

「…はい？」

暫くしてカンナは、改まった様に私を呼んだ。

「本日より、護衛の方がつく事となりました。ご挨拶をさせていた  
だきたいとの事ですが、宜しいでしょうか？」

「……………護衛？」

それは私個人に、という事ですよね。

見回っている方々とは別に、側室一人一人にも護衛がつくんですか  
…。何か大事になってまいりました。

「分かりました…お通しして。」

カンナが開けた扉から入ってきた方を見て、私は一瞬目を瞠った。

女性……ですよ？

失礼な話ですが、入って来た方を見て私はずっと思ってた事は『白馬の王子様』でした。

はい。痛い事は十二分に理解しておりますよ。

ですが本当に、絵本の中から抜け出した様な方なのです。

この世界の成人女性としては珍しいミディアムショートで、襟足までの長さのストレートの髪は、月光を紡いだ様なプラチナブロンド。

長い睫毛に飾られた切れ長な瞳は、透明度の高いライトグリーンで、精巧に造られた人形の様な美貌の中でも一際目を引く。

…物凄い美人さんなのに、何故か女性的なものを全く感じさせません。

未成年女子の夢を詰め込んだ王子様…いえ、騎士様の様です。

「……………」

騎士様は、部屋に入るなり、目を丸くしている私と同様に、切れ長な瞳を瞠る。

え。…何ですか。私の顔に何かついてますか？

頬を擦っていると騎士様は、ハッとすぐに我に返り、私の前に跪いた。

ええー！！リアル騎士様！！？

普通に頭を下げる程度だと思っていた私がアワアワしていると、騎士様は、恭しい仕草で私の手をとる。

「…本日より、トウマ様の護衛を申しつかりました。私、イオリ・ユウキと申します。」

「……ご丁寧に、ありがとうございます。  
ですがそれは、物語の中の騎士様の様に跪いて手を取り、尚且つ私をガン見しながらしなければならぬ挨拶でしょうか…？」

「先程は失礼致しました。ご婦人を不躰に見つめるなど武官にあるまじき行為。……ですが、どうかお許し下さい。これからお護りさせていただく方が、斯かよう様に可愛らしい女性だとは知らなかったのです。」

「……………はあ、」

…え。

何でしょう。この方の言っている事が理解出来ません。

譜面通り受け取る訳にもいきませんし…これは何かの揶揄なのですか？

「……………その、ユウキ様？」

戸惑いながらも私がそう確認する様に呼ぶと、騎士様は、乙女が見惚れるどころか気を失いそうな、甘い笑みを浮かべた。

「お声もまた愛らしい…。ですがどうか私の事はイオリとお呼び下さい。」

「……………。」

……………どうしましょう。

私、この方と上手くやっていける自信が無いのですが……………。

## 02 (前書き)

初投稿から、漸くひと月経ちました。

拙い文章ですが、読んで下さって本当にありがとうございますm

——) m

これからも頑張ります！

「…また、キツいのを付けられたものね。」

漸く…といつても二日ぶりですが、会う事が出来たお二人は、私付きの護衛武官ことイオリ・ユウキと私のやり取りを見て、呆氣にとられていた。

…これが護衛武官の標準仕様だと思っていた私としても、衝撃の事実でしたよ。

イオリ…あ、敬称はつけるなど言われましたので呼び捨てです。せめて『さん』をつけさせて下さいとの攻防戦でかなりの時間を食いました。…結果はご覧の通りです。

イオリは、私をお姫様の様に扱います。

段差があれば前にまわり、『お手を』とニツコリと笑み、東屋の椅子に座ろうとすれば、『お待ちを』といってハンカチを敷く。何処の貴公子ですか。

一々やる事が一昔前の少女漫画です。水溜まりでもあろうものなら、抱えあげられそうで怖い。

でも、これがお仕事なら仕方ありませんよね…と、精神的疲労を感じつつも我慢していると、アヤネ様とシャロン様の護衛の方は、凄く普通だった。

少し離れた場所で、辺りを警戒している様は、私の思い描く護衛武官そのもの。

護衛対象には必要以上には接触しておりません。ましてや恋人の様に過保護に愛でまくるなんて事は、絶対しない。

といいますが、イオリが普通では無いのだと、流石の私も気付きました。

遠い目をする私を、アヤネ様は哀れむ様に眺め、よしよしと頭を撫でてくれた。

「……でもあの人、腕は確かだから。我慢なさい。」

「…知ってるのですか？」

キョトンと目を瞠る私に、アヤネ様は苦笑を浮かべながら頷く。

「有名よ。男よりも男らしい女性武官。剣の腕も女の扱い方も、並の男じゃ太刀打ち出来ないイオリ・ユウキ。」

「……………」

凄い方なのです…色んな意味で。

「…ですが、そんなお強い方ならば、私ではなく他の方の護衛をなさった方がいいのでは？」

エイリ家の侍女が目撃したという侵入者は、ルリカ様のお部屋の近くにいたらしい。

ならば、ルリカ様が狙われているのかもしれないし…私よりルリカ様の護衛が適任かと思えます。

「彼女にも腕の立つ護衛がついているでしょうから、大丈夫よ。…私的にも、危なっかしい貴方に、彼女が付いてくれると安心できるわ。」

そう言いながら、もう一度髪を梳く様に撫でるアヤネ様の手に、うつとりと目を細めると、何故か羨ましそうな顔のシャロン様と目が合った。

…もしや撫でて欲しいのでしょうか。…なんて愛らしい…!!

アヤネ様に撫でられるシャロン様……良い。

倒錯的な魅力があります。

「…？」

頭を撫でてくれていたアヤネ様の手を外す。不思議そうな顔付きのアヤネ様には答えず、シャロン様を手招きする。

「どうぞ。」

そう言って笑むと、シャロン様はパアツと顔を輝かせた。

そんなに撫でて欲しかったなんて、可愛らしい…！！思う存分撫でていただくといいですよ！

……………あら？

輝く様な笑顔で、私に向かい身を乗り出したシャロン様は、何故か私の頭を撫で始めた。

……………えっと、

撫でられたかった訳では無く、撫でたかったのですか…もはや。

少し複雑な気分になりましたが、ニコニコ笑いながら私の頭を撫でるシャロン様と、それを面白そうに眺めるアヤネ様を見ていたら、どうでもよくなりました。

お二人といると、ホンワリと胸が暖かくなるのです。

…辛い事があっても、頑張ろうって、思えるのです。

「……あら。」

ご機嫌なシャロン様に、猫の子のように撫でて貰っていると、アヤネ様が低い声で呟いた。

「……?」

アヤネ様の変化を感じ取った私は、顔を上げて、険しい顔をするアヤネ様の視線を辿った。

「………あ、」

向けた視線が、かち合う。

東屋よりも低い位置にある通路から、此方を見上げていたのはキレイ眼差しの美少女……ルリカ様でした。

ルリカ様は立ち止まったまま此方を見上げている。動こうとしない彼女に、お付きの侍女や武官は戸惑っている様ですが、ルリカ様は微動だにせず此方を………いいえ、私を、睨み付けています。

傍にいるアヤネ様やシャロン様には、チラとも視線を移さず、刺さりそうな鋭い視線を私だけに寄越す。

強すぎる視線には、憎悪や殺意さえ感じました。

「……………」

…何故でしょう。

嫌がらせの数々を受けている身としては、嫌われている事位は理解していましたが…それでも、此処まででは無かったように思います。

現に嫌がらせも、私が大怪我を負うようなものでは無く、陰口もちよつとした厭味程度でした。

こんな殺意のこもった視線を向けられる程には、嫌われてはいなかった筈です。

…ここ数日会わなかった間に、一体何があったのでしょうか。

それとも、最後に会った日に、私、何かしてしまいましたか…？

ズキン、と胸が痛んだ。

私はルリカ様の事が嫌いでは無いので、一方的にここまで嫌われるというのは…結構堪えます。

「……………」

キユ、と胸の辺りを押さえる様に掴むと、ルリカ様の姿が何かに遮られた。

「……………?」

遮ったものの正体は、誰かの背中。細身なのに不思議と頼もしさを感じさせる鎧姿…それから、サラサラと揺れる白金の髪。

「…イオリ。」

私付きの護衛武官であるイオリは、私を背中に庇う様に立ち、ルリカ様の視線を真っ向から受け止めていた。

「…イ、」

「…サラサ様。」

立ち上がるうとした私の肩を、イオリはやんわりと押さえた。お手本の様な綺麗な微笑みは、何故か有無を言わさぬ迫力がある。私は『イオリ、大丈夫だから止めて。』と諫めようとした言葉を思わず飲み込んでしまった。

「私の役目は、貴方様をお守りする事。それは何も暴漢だけに限定したものではありませんよ。」

「……ですが、」

「貴方様が心配なさる様な事はございません。どうか心穏やかにお願いして下さい。」

「……………」

甘やかす様な綺羅綺羅しい笑みで、イオリは言外に『貴方はただ守られていればいい。』と言う。

「……………」

言いたい事は分かる……………けれど納得が、いきません。

何ですか、それ。

私はお姫様でもお人形さんでもありませんよ。

私より余程人生経験豊富であろうイオリの笑顔は、反論を許さない。自分が聞き分けの無い幼子になったような、羞恥と後ろめたさを感じる。

お母さんの言い付けを破ってしまった時のような。

「……………イオリ。」

でも、それで引き下がる程私は、素直な性格ではありません…！

真っ直ぐに向けられる翠の瞳を真っ正面から見つめ返し、私は口を開く。

「…其処を、退いて。」

「…サラサ様。」

困ったような、声。諫める響きを持つイオリの声音に、私の負けん気は益々刺激されました。

守って下さるのは有難いです。役目を全うしようとする姿勢も、好ましいと思います。

…ですが、女の戦いに首を突っ込むのは違つと思つたのですよ…！

全力で嫌われて憎まれるのは正直キツイですが…私が隠れてしまえば、逃げた事になります。不戦敗確定です。

まだ何をしたかも分かっていないのに…尻尾巻いて逃げるなんて女が廃りますとも…！

「…退きなさい。命令です。」

静かな声でそう告げると、イオリだけでなく、事の成り行きを見守っていたアヤネ様とシャロン様も目を瞠った。

イオリは、それ以上何も言わない私を、暫く見つめていた。何かを読み取るうとする瞳から目を逸らさずにいると、やがて一つため息をついたイオリは、数歩横に移動する。

「……………」

ルリカ様は、まだ其処にいた。

立ち上がり、彼女に対峙する様に向き直る。鋭い視線を受け止め、真っ向から見つめ返せばルリカ様の瞳が睜られた。

さあ、逃げも隠れも致しませんから。

やるんなら、真っ向勝負といきましょう。…何の勝負かは分かって  
ませんけどね。

「……………」

ルリカ様は、数秒私の顔を見つめていたが、やがてツンと顔を反らし、その場から立ち去って行った。

慌ててその後続く侍女や武官の背を見送り、脱力した私は息を吐き出しながら、腰を下ろす。

「もう。……何をやっているのよ、貴方は。」

「だ、大丈夫ですか？」

ふうやレやレ、と遣り遂げた気分になっている私に、呆れた声と、心配げな声かけられた。

「大丈夫なのですよ！」

ニツコリ笑む私に、イオリは困った顔に苦笑を浮かべ

『負けず嫌いな困ったお姫様だ。』と呟いた。

「…またですか!？」

思わず大きな声を出してしまった。

驚きの余り、手に持っていたカップを取り落としそうになり、慌てて両手で支える。

護衛武官であるイオリは、そんな私をからかうでも無く、神妙な顔で頷いた。

「面目ごさいません。賊の侵入を二度に渡り許してしまうとは…我ら武官の職務怠慢に他なりません。」

秀麗な美貌を歪めるイオリは、とても悔しそうに見えた。

彼女の顔には、後悔や申し訳無さ…そしてそれ以上に、屈辱の二文字が刻み込まれている。

武官としての自信と誇りを持つイオリからしてみたら、自分らがこうして護衛し、見回っているにも関わらず再度の侵入を許してしまった事は、恥以外のなものでも無いのでしょうか。

跪き私の手をとったイオリの表情は硬く、初めて会った時の様子とは全く違っていた。

「またこうして御身に不自由を強いてしまう事を、どうかお許し下さい。」

「…イオリ……。」

私は、何と声をかけていいのか分からなかった。

後宮に、何者かの侵入を許してしまったのは、なにもイオリだけのせいではありません。寧ろ彼女は、私の事をとても気に掛け、護衛としての職務以上に、よくしてくださっていると思います。

けれど、全くイオリのせいでは無いとは言えません。彼女には何の咎もありませんと言い切ってしまうえば、逆にイオリのプライドに傷をつけてしまう事になる様な気がします。

門番も、後宮内外の見回りの兵士も、側室の護衛も、纏めて『武官』のお仕事です。自分だけの仕事を全うすれば、後は関係無いなどと言ってしまう様では、組織に属する資格は無い。

…少なくともイオリは、そんな小さな器では無いでしょう。

己の失態と受け止め、どんな叱責でも受けようとしている姿には、少し感動しました。

最初は、『どうしようこの人…』と苦手に思っておりましたが…

「…イオリ。」

「…はい。」

顔を上げ、真摯な瞳を向けるイオリの手を、私はそっと両手で包んだ。

僅かに瞞られる翠緑の瞳に、私は笑みかける。

「これからも、宜しくお願いします。」

「…！」

格好良いのですね、イオリ。

矜持が高く、自分に敵しい貴方なら、慰めや赦しなどいらないうし  
ようつ？

ならば、私が貴方に言えるのはこれだけ。

無茶無謀で負けん気が強い私は、多分色々迷惑もかけてしまうでしょうが、どうぞ宜しくお願いします。

そんな想いを込めてイオリを見ると、彼女は数秒間をおいて、漸くいつもの余裕ある笑みを浮かべた。

「有り難きお言葉。姫の期待を裏切らぬ様、尽力させて頂きます。

」

そうそう。貴方はそんな感じではないと、調子が狂います。

……姫呼びは勘弁していただきたいですが。

「……ところで、今度はどういった状況だったのですか？」

落ち着いた所で、気になっている事を聞いてみる事にした。

前回はルリカ様の侍女が、ルリカ様のお部屋の近くで目撃したと聞いております。

今回は一体、何処に？

イオリは、表情を引き締めた。

数秒の沈黙の後、引き結ばれていた唇がゆっくり開く。

「…エイリ家ご令嬢、ルリカ様の私室近くの通路、と報告させていただきます。」

「！」

…同じ場所！？

いえ、厳密に言えば同じでは無いのですが、ルリカ様のお部屋近く、という括りで考えれば前回と一緒にです。

「……それは…色々気になりますね。」

「はい。」

ポツリと呟いた私の言葉に、イオリは堅い表情で頷く。

普通に考えれば、前回侵入者を発見した場所というのは、他の場所よりも見張りが強化されるものだと思う。

発見場所がルリカ様のお部屋近く、という事も考慮され、側室一人につき一人の護衛のところを、彼女だけは二人付いている筈。

また後宮内だけでなく、外の見回りも増えているのだと思うけれど……それらを掻い潜って同じ場所まで辿り着くというのは至難の業。

抜け道的な裏技でも無い限り、不可能に近い気がします。

また、かなりの危険を冒してまで漸く侵入したのにも関わらず、一人に発見された程度で引き返す事も少し不自然な気がする。

後宮に不法侵入して、無罪放免とはいきません。最悪死罪。

そんなリスクを背負いながら、何もせず二度も逃走というのは、どうなんでしょう？

「……………」。

方法、ルートも気になるところですが、目的も重要ですね。

二度続けてルリカ様の部屋近くで発見されるという事は、目的は彼女なのでしょうか。

…… 不明な点と不可解な点、ともに多過ぎます。

「……………」。

……………そう。

多過ぎる、気がするのです。

**護衛武官の見解。(前書き)**

サラサ付きの護衛武官、イオリ・ユウキ視点です。

## 護衛武官の見解。

「…これはこれは。」

突然の来訪者に、苦笑を浮かべる私を押し退ける様に、彼女は部屋へと押し入った。

「…失礼するわよ。」

「アヤネ様っ？」

理知的な美貌に険しい表情を浮かべ、サラサ様の部屋へ入って来た女性は、アヤネ・サイリ様。礼部れいぶ 侍郎じろうのご息女である。

私を困らせない様、室内で大人しく本を読んで過ごして下さいいたサラサ様は、突然の訪問に驚き、漆黒の瞳を丸くした。

立ち上がる際、膝の上の書物を取り落としそうになり、慌てて受け止める。

それを大切そうに引き出しにおさめたサラサ様は、アヤネ様に向き直り、気遣わしい視線を向けた。

「…どうかなさいましたか？」

「……………どうもごつも無いわ。」

サイリ様は、実に分かりやすく苛立っておられた。

美人な彼女の怒りの表情は、より一層美しいが…その分迫力も増す。ただその怒りは、サラサ様に向けたものでは無いようだ。サラサ様もそれを理解しているのか萎縮する事無く、ただ困った様に眉を下げた。

「下らない噂を耳にしたのよ。」

「……………噂？」

虚を突かれた様な表情は、少し幼く見え、愛らしい。そんな彼女にアヤネ様は声を更に荒げた。

「…貴方の噂でもあるの…！」

「……………はあ。」

噂、とやらの内容はまだ分からないが、あまり良い内容では無い事は予想がつく。

だがサラサ様は、気の抜けた返事を返しつつも、サイリ様に『まずは、座りませんか。』と椅子をすすめる。∴侍女にお茶まで頼むサラサ様は、大物だと思う。

「アヤネ様。」

「……何。」

苛々としていたサイリ様は、ニツコリと笑むサラサ様に若干押された様に身を引いた。

「取り敢えず、落ち着きましょう。」

「……………」

∴立場が逆転しているな。

この方々のやり取りを、毎日見ている訳では無いが、私を知る限り、『好奇心旺盛なサラサ様を嗜める、冷静なサイリ様』というのが基本図式だった筈。

出端を挫かれた形になったサイリ様は、一つため息をついて、椅子

に腰掛けた。多少の脱力感は否めないが、頭に血が上った状態よりは良いだろう。

絶妙な頃合いで侍女がお茶を出し、それが半分に減る頃には、大分冷静さが戻ってきた様だ。

「…それで、噂というのはどのような？」

サラサ様が訊ねると、再び眉が吊り上がりはしたものの、サイリ様は冷静な声で話した。

「…先日、賊が再度侵入した件について噂が広がっているの。」

「はい。」

「元々後宮は嚴重に警備されているわ。一度目の侵入だって至難の業だった筈よ。…なのに、更に強化された警備をまたも掻い潜るなんて、不可能に近い。…そうでしょう？」

「…そうですね。」

サイリ様につられる様に、サラサ様も真剣な顔で頷く。その表情は、可愛らしいというよりは、美しいという表現が似つかわしい。

「…その不可能を可能に変える方法として、『誰か内部の人間が手引きをしているんじゃないか』という噂が流れているわ。」

「……………成る程。」

サラサ様は、一つ頷き、

「それが私の噂に繋がるのですね。」

実に冷静に、そう呟いた。

キツとサイリ様は、眼尻を吊り上げる。

「…それだけなの！？根も葉もない不名誉な噂を流されているのよ……………！！！」

声を荒げるサイリ様に、サラサ様は目を睨り、次いで嬉しそうに微笑んだ。

「…アヤネ様。」

「何っ…！？」

「ありがとうございます。」

「…っ、」

またも、サイリ様は勢いを挫かれ言葉を詰まらせた。

「根も葉もないからこそ、取り合う必要も無いかと思うのです。…どうせ理由としては、私がルリカ様と対立しているから程度のものでしょうし。」

「…その通りよ。…だから貴方だけじゃなくて、ホノカ様の名前もあがっているわ。」

厳しいお顔だったサイリ様は、暫く沈黙した後、深く嘆息し、そう呟いた。

サラサ様は嬉しそうにそんな彼女を見つめている。

サラサ様にとっては根拠の無い馬鹿げた噂などより、冷静なこの方が、こつこつと取り乱す程にサラサ様に肩入れしている…その事実の方が余程重要なのだろう。

頬を染め、幸せそうに相好を崩す様は、目眩がする程に可愛らしかった。

「心配して下さったのですね。」

「っ！…お馬鹿！」

直球なサラサ様の言葉に、サイリ様は珍しくも顔を赤らめ外方を向いた。

「…出どころは何処だ。」

そう呟かれた声は、恐ろしく低かった。

辺りを凍てつかせる様な冷気を放つ我が主人に、私は無言を貫く。  
… 確証の無い事は言えないという以前に、言ったらお嬢様方がどうなる事やら。

「…イオリ。」

呼ばれた名はより一層低く、凄味が増している。  
大抵の者は平伏して命乞いしそうな迫力だ。… 生憎その括りに私は含まれていないが。

内心でため息をつきながらも、表面上は神妙な顔で俯く私と、怒気を放つ陛下の間に沈黙が落ちる。  
常識人が此処にいたのなら、即座に臍腑か精神を病みそうな空気が流れた。

「…お止め下さい。陛下。」

その沈黙を、冷静な声が破る。

呆れを含んだソレは、場に似付かわしくなかった。この状況でそんな態度のこの男も、常識人の括りには入るまい。

銀の髪と瞳を持つ氷像の様なこの男の名は、セツナ・イノリ…近衛軍大将にして私の上司であり、

「我が妹を、あまり虐めないでいただけますか。」

私の、腹違いの兄である。

因みにあちらは正妻を母に持つ嫡男。私は所謂妾腹という奴だ。だがドロドロとした確執がある訳では無く、奥様と母の関係も悪く無い。

家名が違うのは、子供のいない伯父夫妻の養子となったからという理由だ。

跡継ぎを産むつもりが無い私でいいのかは、甚だ疑問だが、彼らが良いというのなら良いのだろう。

…話は脱線したが、つまり、兄が陛下の幼なじみであるという事は、

私も同じであるという事。

私は兄の後ろをついて回っていたに過ぎないが、それでも大抵の人よりはこの方の怒気には免疫がついていると思う。

…そんな私でも、この様に怒りを顕にする陛下は珍しいと感じてはいるが。

戦場での鬼神の如き猛々しさは別にして、普段のこの方は冷静沈着。懐が深く、声を荒げ怒鳴り散らす様な真似はまずしない。

大切なものを傷付けられた時の勘気は凄まじいものがあるが、それは命に関わる様な重大事のみ。

こんな、根も葉もない馬鹿げた噂に、此処まで苛立つとは…。

「頭を冷やして頂きたい。…こんな何の証拠も無い噂など取り合うだけ時間の無駄でしょう。」

目を伏せたため息をつく兄を、皇帝はギロリと睨む。

「…そんな下らない噂に、サラサが傷付けられているのだぞ…!!  
簡単になど許せるか!!」

「……傷付けられて、ですか。」

呆れを多分に含んだ兄の言葉に読み取れる意志に、私も心の内で同意する。

…盲目、とでも言おうか。

サイリ様といい、冷静な人程、大切な人間の事には過剰反応するものなのだ。

「…サラサ様は、そのように脆弱な方でしょうか？」

「……何？」

「……どうですか？イオリ。」

言ってやれ、とばかりに水を向けられ、私は内心でヤレヤレと嘆息した。

「サラサ様は、全く気になさっておりませんでした。」

「……真か。」

「はい、ご本人もそう仰っておられました。…お心の内は、私には計り知る事は出来ませぬが、おそらく本心ではないかと。」

陛下の眉間に、シワが刻まれる。

「…何故分かる。」

無然とした表情に、笑いそうになって、私は顔を引き締める。

…分かりますとも。

寧ろ、貴方の方が良く知っている筈だ。

「…あの方は、お顔に出ますから。」

「！」

サラサ様は、感情が顔に出やすい。心許した者ならば、尚更。

それは勿論陛下にも心当たりがあった様で、陛下は言葉を詰まらせる。

大切な方に関する事は、冷静でいられないのは当たり前だろう。だが少し頭を冷やして、あの方を見てみれば分かる。

サラサ様は、強いお方だ。

「お嬢様方に面と向かって糾弾されたのなら、『逆に方法と経路を  
考えて貰いましょう。何かの足しになるかもしれませんが。』と笑っ  
ていらっしやいました。」

「……………」

人を疑い責めるのならば、それ相応の証拠と納得出来る理由を持っ  
て来い。 言外にそう仰っているのだ。

なんと逞しく、強かな。

あの方は、ただ可愛らしいだけの女性では無い。

「……………」

陛下は息を吐き出し、漸く表情を緩める。

苦笑を浮かべてはいるが、そんなサラサ様を好ましく思っているの  
は一目瞭然。

私は兄と目を合わせ、互いに苦笑したのだった。

.

空気が和らいだ所で、話を本筋に戻すべく兄は『ところで』と切り出した。

「目撃証言を集めさせていた件ですが…」

「ああ。」

陛下の顔も真剣なものに変わり、続きを促す様に相槌を打つ。

「目撃者は、エイリ家の侍女のみ。後宮内外を警備していた武官等は、誰一人見ていないそうです。」

「…矢張り、か。」

陛下は瞳をスウと眇め、椅子に寄りかかり腕を組んだ。負荷を受けて椅子が僅かに鳴る。

「だからこそ、『誰かが手引きした』などという噂が流れたのでしよう。」

私の言葉に、陛下は今度は感情的になる事は無かった。冷静になれば、取るに足りない事だと分かるのだろう。そもそも、サラサ様が当事者でなければ、この方はきつとそんな噂など『馬鹿馬鹿しい』の一言で一蹴していた筈だ。

「お嬢様方は、相当武官を見縊っているらしいな。…どんな手でどんな場所を通ればそんな事が出来る。」

後宮は、出入りにとても厳しい検査がある。

武官は勿論、側室や侍女も例外では無い。

外部の者を入り込ませるなど、まず不可能だろう。

元々勤めていた武官や侍女が凶手となる場合は防ぐ事が難しいが、素性が定かで無い者はまずそれらの職にはつけない。  
一族郎党を巻き込んでまで、凶行に及ぶ者はほぼ皆無だ。…完全にいない、とは言い切れ無いが。

「底が浅い方々は、その様なところまでは考えておりませんよ。」

嘲る様に言った陛下の言葉に、兄はそう返した。

バツサリと切って捨てる言葉には、温度というものが感じられない。

「まあな。」

陛下は雄々しい美貌に、皮肉げな笑みを浮かべた。

「侍女の証言一つとっても、お粗末過ぎます。『前の賊と同じ人物』と言いますが、『布で頭や口を覆った大柄な男』が何故『前と同じ人物』だと分かるのです？」

聴取に立ち合っていた私は、馬鹿馬鹿しい、と思いつつも軽く其処をつついてみた。

明らかに狼狽した侍女は、同じ色の布で顔を覆っていたから同一人物などとはざいていたが…黒い布が世の中にどれ程出回っていると思っっているんだ。

大柄な男も然り。鴻国は武力に秀でる男が多いので、体格が良い男は数多居いる。

目が二つで鼻が一つ、口も一つだったから、同じ人物、と言っている様なものと分かれ、と言いたい。

「何が目的かは、大体想像がつかますが…事の重大性をご理解されていないようですね。侍女ですが…あのご令嬢は。」

兄の言葉に、陛下は目を伏せる。その静かな表情からは、憐憫や同

情は一切窺えない。

残酷な程に冷静な声が、呟く。

「姫君は、きっと深くは考えていないのだろう。…大勢の人間を巻き込み謀り、ひいては皇帝をも欺く事の罪の重さを。」

「……愚かの一言に尽きます。」

話の流れは最早、一点に絞られている。可能性の一つでは無く、結論として。

二度目の賊の侵入は、  
狂言である、と。

状況全てが導き出した答えがソレだ。

「…そうとも知らずに、父親である吏部尚書が騒ぎ立てておりますよ。陛下が娘をお守り下さらないのなら、自分が娘を守る、と。」

「…剣の持ち方すら知らぬくせに、よく言っわ。勝手にしろ……と言いたい所だが、アレは何をしでかすか分からんからな。」

馬鹿にする様に鼻を鳴らす兄に、陛下は苦々しい顔付きでそう返す。

先帝の頃の地位にしがみ付いている輩が多数いるが、その中でも吏部は、入れ替えをしたいと常々陛下が思っておられる部署だ。

「いつそ醜態を晒し失脚してくれると助かるが…それには周りを巻き込む可能性があるからな。」

長く息を吐き出す陛下に、私は表情を引き締める。

私は私の務めとして、サラサ様をお守りせねば。

あの方は、皇帝陛下の大切な方。ひいてはこの国の大切な方。

……………そして、それだけでなく、

私自身の、大切なお方として。

## 側室（仮）の焦り。

「……………」。

手元の本のページを、パラリと捲る。

部屋に閉じこもっている時間の殆どを読書にあてていたお陰か、少し前と違い読めない文字はほぼ無い。

だが今は、文字は読めても意識は上滑る。

違う事に思考を捕われている為、内容が全く頭に入らない。

本のページを目で追う間に、何度扉へと視線を經由させた事か。

「……………」。

開いていても全く意味を為さない手元の本を閉じ、顔を上げる。

開く様子の無い扉を数秒見つめ、私は落胆のため息を吐き出した。

「イオリはまだ戻らないのかしら？」

私のぼやきに、傍にいたカンナは困った様に笑む。

「そうですね。…報告に行っておりますので、もう少し掛かるかもしれない。」

「……そう。」

それもお仕事なのだから、仕方ないと思いつつも、逸る気持ちを抑えきれない。

…気になったら一直線なこの性格、直した方がいいのかもしれないね。

実はさつきまで、アヤネ様のお話やカンナに貰った情報を参考にしながら、侵入者の件を私なりに整理していた。

自分で調べられない為不確定要素が多いので、確証は無いのだけけれど、ある程度纏められた気はする。

……その中でふと、事件に直接は関係無い事が気になったのです。

アヤネ様のお話は、『誰かが賊の侵入を手引きした』という噂が流

れているというものだった。

その手引きした人間が私ではないかと疑われていた為、アヤネ様は心配してくださった訳ですが…

もう一人、お名前が上がっていた方がいた事を思い出したのです。

『ホノカ様の名前も上がっている』そうアヤネ様は仰っていた筈。

……自分が図太い為、失念していましたが、普通のご令嬢はそんな噂をたてられたら、かなり気に病むのではないか、と思い至った訳です。……今更。

ああもう！私の馬鹿っ！！

気が利かないにも程があります…！！

母がよく言っていたでしょう。『大抵の女の子は硝子の様に繊細なの。アンタの樹脂製ハートと一緒にしちゃダメよ。』って。

ちなみに樹脂製ハートというのは、樹脂製のパネルは一見硝子に似ているが、とても割れ難い事から、『繊細に見えて、丈夫』という意味の母造語です。…鋼の心臓と言われなかっただけマシだと思っべきなのか悩み……ってソレは今置いておきましょう私。

とにかく！

ホノカ様はきつと深く傷付いておられると思うのです！

あんな穏やかな気性な方なら、尚更。

気付いたら、いてもたってもいられない。

想い悩んだ末、我が身を傷付ける様な事は……流石に無いと思いたいですが、万が一という事もあります。

顔見知り程度の私が行っても何の慰めにもならないかもしれませんが、私はアヤネ様に心配していただいて嬉しかったです。

一人じゃないって、凄い事なんだって、実感しました。

だからホノカ様にも、一人で想い悩んで欲しくないのに……。

今出掛ける事を禁じられているのですよ……！

誰につて……、イオリです。

イオリが、上官の方に報告に行っている間、勿論、代わりの護衛の方がいらっしやるのですが……。

イオリは出掛ける前に、ニッコリと綺麗な笑みを浮かべ『自分がい

ない間は、外出はお控え下さい。』と言い置いて行った。口調は下手<sup>たて</sup>だったが、笑顔は有無を言わさぬものでした。

…破ったら、分かっておりますね？と顔が言っていた。怖い。

「……………」

言い付けを破る事も、困らせる事も本意ではありません。そもそも私の考えすぎかもしれせんし。

でも、

「……………サラサ様？」

カタン、と音をたてて立ち上がると、カナナが私を呼ぶ。

困惑した様な声のカンナに瞳を合わせ、私は静かに返した。

「……出掛けます。」

「……………」。

……………」。

来てしまいましたよ。

あれから、渋る護衛の方と、心配してくれるカンナを説き伏せ、なんとか部屋を出る事が叶いました。お願いという名の我が儘を押し通した私に、二人ともついて来てくれています。…本当に申し訳ありません。

…ですが、後悔はしたくないのです。

掴めるかもしれない誰かの手を、見ないフリは絶対に嫌です。

「……………」。

ホノカ様のお部屋の前に立ち、私は心を落ち着ける為、深く息を吸い込む。

「…よろしいでしょうか。サラサ様。」

吸い込んだ息を吐き出し、私は伏せていた目を開けた。

「……いいわ。」

私が頷くと、カンナは扉に向き直り、ノックをした。

コンコン、

「……………」

長い沈黙が落ちる。返答は中々こない。

留守……な筈は無いと思うのだけれど。

少し私が不安になった頃、中から小さな声が聞こえた。

「…はい。どちら様でしょうか。」

お付きの侍女であろう女性の声は、明らかに警戒している。怯えと疲れとが交ざった声には、覇気が無い。

「トウマ家侍女、カンナ・クダンと申します。」

「……………トウマ様」

小さく呟かれた声から感じるのは、戸惑い。

警戒している相手では無いが、訪ねる理由が分からないからだろう。

それでも扉はゆっくりと開いた。

「……………！」

怯えながらも出てきた侍女は、カンナの後ろにいる私を見て、瞳を見開いた。

……………ごめんなさい。規格外…というか、破天荒な側室で。

私の代わりに話をしようとしてくれていたカンナを制し、一步前に出た。

「…直接訪ねる様な、礼儀知らずな真似をして申し訳ありません。  
…ですが、どうしてもホノカ様にお会いしたかったのです。お取り  
次ぎ下さいませんか？」

「…お、お止めください！」

頭を下げた私に、侍女の方は蒼白になった。…困らせるのは更に本  
意では無いので、直ぐに顔を上げる。

「……………」

侍女の方は、とても困ってらっしゃった。  
私と室内を、交互に見ている。

ホノカ様と私は、会った事すら数える程度しかありませんし、困惑  
するのは当り前かもしれせん。

…ここは、ご様子だけお聞きして帰るべき？

私が出直す事を考え始めていると、侍女の方は意を決した様に扉を  
大きく開けた。

「…中へどうぞ。」

「！」

人目を気にする素振りをした彼女に、私は口早にお礼を言って室内へと足を踏み入れた。

「……………」

後ろで扉が閉まる音を聞きながら、室内を見回す。私の部屋と似た様な造りの落ち着いたリビングには、ホノカ様の姿は無かった。

お掛け下さい、と勧められた椅子に座り、私の背後に二人が立つ。

お茶の用意をしようとする侍女の方をやりわり止め、早速話を切り出した。

「…あの、ホノカ様は…、」

「……………」

侍女の方は、表情を曇らせ俯く。ふらつきそうな位、彼女は憔悴していた。顔色は蒼白く、良く見ると目の下には隈くまが出来ている。

「……数日前から、寢室に閉じこもってしまわれたのです。」

「……………」

…ああ、やっぱり。

普通の女の子…しかも貴族の令嬢が、誹謗中傷に耐性がある訳ないんですよ。

「…私がいけないのです。噂を、あの方のお耳に入れてしまうなんて。」

侍女の方は、悔いる様に顔を歪めた。握り締めた手が震えている。

「…隠した所で、いつかは知る事になった筈です。」

「…ですが、」

「それに、理由も分からないまま、陰で何かを言われ続ける事が辛いでしょう。」

「…トウマ様。」

悪い想像は、考えれば考える程膨らんでしまう。それを止める事が

出来るだけマシです。

…辛い事にかわりは無いでしょっが。

「…それよりも、閉じこもっている、と言っていましたよね。…お食事はとっていらっしやるんですか？」

「…お部屋の前に置いておきます、とお声を掛けているのですが…」

「……………」

この反応は、食べていませんね。用意したまま残されているパターンです。

「…何日くらいですか？」

「…三日間、何も召し上がっておりません。」

「三日…。」

…あり得ません。

餓えで自殺でもする気ですか…！！

「……………トウマ様？」

突然立ち上がった私に、侍女の方は訝しむ様な声をかける。

「消化の良いもの……粥でいいです。用意して下さい。」

「え……あの……」

戸惑う声には返事をせず、私はホノカ様の寝室の前に立った。

…本当は、なるべく驚かさないうちにしようと思っていました。大丈夫ですよ、と根気強く語り掛けようと……

でも、急遽取り止めます。

何よりもまず、ご飯を食べていただきたい!!

コンコン、と少し強めに寢室の扉をノックした。

「……………」

少し待つてはみるが、やはり返答は無い。  
起きている事前提で、そのまま扉越しに語り掛ける事にした。

「ホノカ様。サラサ・トウマです。」

「……………」

相変わらず、返ってくる声は無い。だが、扉に近付けていた耳は、  
中からの小さな音を拾った。

衣擦れの様な微かな音と、木が軋む音は、多分彼女が寝台から身を  
起こした時のもの。

…追い詰められた精神状態では、眠る事も難しいんじゃないかとは  
思いましたが…眠れない、食べれないでは、本当に死んでしまいま  
すよ。

「聞こえているのでしたら、此处を開けて下さい。」

「……………」

「表に出て下さいとは言いませんから、何か召し上がって下さいませ。」

「……………」

「…ホノ力様。」

何を言っても、何度呼び掛けても返事は無い。

…この位で出てきて下さるなら、侍女の方はあそこまで憔悴はしてなかったとは思っているので、予想の範疇内ですが。

…一応声も掛けましたし、此处からは強引にいかせていただきますよー。

「…ホノ力様、扉には近付かないで下さいね。」

中へと声を掛けると、私は少し扉から離れた。

寝台の扉は、私の部屋のものと同じ観音開きのタイプ。外見が一緒なので、構造も一緒だと思います。

私の寝室には、内鍵は一応あるが、細い棒を門の様に通してあるだけ。

…つまり、ですよ。

それさえ壊せば、開く訳です。

「…さあ、いきますよ。」

「さ、サラサ様っ!!」

衣の裾を持ち上げ、狙いを定めた私を、珍しくも慌てた様なカンナが止めた。

「何をなさる気ですか…っ!」

「……………蹴破ろうかと……………」

「サラサ様っ!!」

……………怖い顔になったカンナに、凄い勢いで怒られました。いくらオカン級に懐の広いカンナでも、どうやらコレはアウトらしい。当り前だけど。

「お怪我をなさったら、どうするんですか!」

「…え、ソコ!?!」

カナナ…やるうとしていた私が言うのもなんですが、他人様の寝室の扉を蹴破ろうとした人間ですよ。叱るべきはそこじゃあないですよ。

「…カナナ、……?」

何処から突っ込むべきか、考えあぐねている私の耳に、

何かが外れる様な、小さな金属音が聞こえた。

「……………」

ゆっくりと、扉が開く。

ほんの少し開かれた隙間から、ゆらゆらと不安定に揺れる白いものが覗く。

それはシーツを頭から被った塊…お顔は見えないけれど、多分ホノカ様。

拒絶されない内にと、私は隙間から寝室へと身を滑り込ませた。

「……………ホノカ様、」

「……………、」

シーツを被ったまま、ホノカ様は俯いた。

背は高めの彼女が、小さく頼りなげに見えるのは、背を丸めている事だけが理由では無い。

細い肩は、震えている。

「……………ど、して…?」

噛み締められ血の気が失せた唇から、消え入りそうな声が洩れた。

「……………え?」

言葉は聞こえたが、ソレが何をさしての言葉なのかが分からなくて、私は聞き返した。

「……どうして…貴方は、そんなに明るくいられるの…?」

「……ホノ、」

「どうして、私ばかり…私だけがこんな惨めな気持ちにならなくてはいけないの…!?!?」

「…っ、」

私の声は、激昂したホノカ様に遮られた。顔を上げた拍子にシーツがずり落ち、ホノカ様の顔が漸く見れた。

明らかにやつれてしまったホノカ様の顔色は悪い。それなのに目だけが怒りによってか爛々と輝き、まるで別人の様相だ。

穏やかに微笑む佳人の面影は、そこには無い。

「こんな閉鎖空間で誰かに嫌われては生きていけないから、人の顔色を窺って、なるべく目立たない様になっているの…それでも嫌味を言われて…!!自由に生きている貴方は、親しい方が居て幸せそうに笑っている…何故なの!?!?」

「……………」

「今回の事だって、そう。同じ噂をたてられているのに、貴方は堂々としていて…私は惨めにコソコソ隠れる…もう嫌!!こんな

場所、もう嫌なのっ……!! 苦しいの……!!」

「……………」

私は黙って、ホノカ様の言葉を聞いていた。  
今回の事だけじゃなくて、おそらくずっと前から、ホノカ様の胸に支えていた苦い感情の吐露を。

「……………ホノカ様、」

「…っ?」

やがて、全て吐き出したのか、荒く呼吸を繰り返すホノカ様の手を取り、

私は彼女に言った。

『取り敢えず、ご飯食べましょうか。』と。

「……………」。

用意してもらったお粥を取り分け、手渡そうとしたが、ホノカ様は受け取るうとしなかった。寝台の上で膝を抱えたまま俯いている。

私の、空気を読まない発言のせいで怒りを削がれたのか、さっきまでの勢いは無いけれど、眉間にシワを寄せたまま、ムス、と黙っている姿は、拗ねた子供の様です。

シーツは被ったままですし…。小さい女の子みたくて可愛い事は可愛いんですが…。

「…ホノカ様。ご飯食べて下さいな。」

「……………」。

ほら、とお粥を渡そうとしても、ホノカ様は益々俯く。膝に顔を埋めて、こっちを見ようとしません。

……………誰か助けて下さい。

「……………」

困ったな…。

私が一つため息をつく、ホノカ様の肩がピク、と小さく揺れた。

それを見て、私は苦笑を浮かべる。

だって、その反応はまるっきり、拗ねた子供のもですよ。

顔を背けつつも、意識は此方に完全に向いている。お母さんに反抗しつつも、怒らせはしないと気にしている子の様。

私は器からお粥を一さじ掬う。

時間が結構過ぎてしまった為、冷まさなくても丁度良い温度になっていそうだ。

「ホノカ様。あーん。」

「…っ!？」

私の呼び掛けに、チラリと此方を窺い見たホノカ様は、私の行動に目をむいた。

驚いてますねー…まあ、女の子同士であーん。は無いです…確かに。ですが！…痛がるうと関係無い！！優先事項は、まずはホノカ様の栄養摂取です！

嫌ならご自分で食べましょうねー。

「……………いらな…ムグツ！？」

拒絶しようとして開いた唇に、半ば無理矢理突っ込みました。

「……………。」

お嬢様であるホノカ様は、無理矢理食べさせられたにも関わらず、ちゃんと咀嚼している。口の中にもものが入っている時に話すなんて論外なんでしょうね。

「…っ、…何す…ングツ」

はいはい次ですね。

飲み込んで、やっと抗議しようとしていたところに、再びお粥をイン。

鬼畜と呼ばれても、止める気は無いですが何か。

そのまま数回、そのやり取りを繰り返す。学習能力が無いあたりに少しキュンとききました。

「……………」

最後の方には諦めたのか、ホノカ様は何も言わずに口を開け、お粥を食べていた。

「……………」

取り分けた分は、あと少しで完食です。もう少し食べて頂きたいところですが…その前にお茶でも用意しますか。

最後の一さじをホノカ様の口に運び、カンナを呼ぶべく振り返ろうとした私は、目の前の光景に目を瞠る事となった。

「……………」

ホノカ様は、無言のまま、泣いていた。

透明な雫が、白い頬を滑り落ちる。ホロホロ、ホロホロと、とめどなく。

「…ちよ、…ホノカ様っ!？」

私は吃り、慌てふためいた。

…これはもしかしくなくとも、私が泣かせたんですよね!？無理矢理食べさせたのが、そんなに屈辱的でしたか…!!

「……………っ、ふえ…」

「…う、ごめんなさいっ!…」

ホノカ様はしゃくり上げ、本格的に泣き出した。私はその背中を擦りながら、謝る事しか出来ない。

殴られる覚悟はしたんですが、まさか泣かれるとは…そもそもこんな場面で殴れる様な方なら、閉じこもって無いって話ですよね。…失念しました。

ああああ…どうしよう…。

「……………」

途方に暮れている私の袖口を、つい、と何かが引つ張る。視線を下げると、ホノカ様の細い指が、私の袖を掴んでいた。

「……………」  
「ホノカ様？」

呼び掛けながら覗き込むと、袖から移動した指が、私の手を握る。縋る様な懸命な力に、私は目を見開いた。

「……………」  
「ホノカ様……」

「……………」

そっと手を回し、震える背を、ぎゅゅと抱き締める。私の肩口に顔を埋めたホノカ様は、小さな子供の様に泣き声をあげた。

「……………」  
「ふう、ふ、あああ……！！」

背中に回ったホノカ様の手の力は、痛いくらいだったけれど、私は何も言わず、ポン、ポン、と一定のリズムで、ホノカ様の背を叩いていた。

それ位しか、出来なかった。

.

あれから暫くの間、ホノカ様は泣き続けた。

我慢に我慢を重ねた結果、彼女の精神は限界ギリギリだったんだろ  
う。溜め込んだ淀みを吐き出す様に、ホノカ様は声を上げて泣いた。

その間、ただ背中を擦り続ける事しか出来なかったけれど、やがて  
ホノカ様はゆっくりと顔を上げる。

「……………」

赤くなった目元を拭いながら、鼻を嚼るホノカ様の顔は、涙でぐし  
やぐしや。でもその表情は、さっきよりずっと、晴れやかだった。

照れ臭いのか、視線を反らしながら、ホノカ様は頬を染める。

「……………酷い顔してるでしょう…?」

「そうですねえ。」

「！」

自分で言っておきながら、ショックを受けた様に目を睜り眉を下げるホノカ様に、私は吹き出した。  
肩を震わせながら、ホノカ様の目尻に留まっていた涙を拭う。

「でも、良いお顔をしてらっしゃいますよ。」

「……………」

からかわれたと分かったホノカ様は、頬を膨らませ、恨みがましい目で私を見た。

271

…そういう素直な反応されると、余計弄りたくなるんですが。  
私より背も高く、年上の筈なのに、妹の様です。

…此処だけの話、シャロン様の方が落ち着いている気がしますよ。

「……………意地悪。」

「はいはい。…取り敢えず、落ち着いたのなら、お茶でも用意しましょうか。泣いたから喉渴きましたでしょう?」

「……………」

ムクれたままのホノカ様は、それでもコクリと頷いた。

私は寢室の外で待機してくれているであろうカンナを呼び、お茶の用意をお願いする。

髪も乱れ、尚且つスッピンなホノカ様を人前に引つ張り出す訳にも  
いかなないので、寢室で大人しく待っている事にした。

「……………」

膝を抱えたホノカ様は、ピタリと私に寄り添う。

…私は、こんな大きな娘さんを持った覚えは無いですよー。

しょうがないなあ…と、ため息を一つついて、私はホノカ様のした  
い様にさせる事にする。

私の肩に頭を乗せ、目を瞑るホノカ様は、消え入りそうな声で、ポ  
ツポツと語りだした。

「……………本当はわたし、後宮なんて入りたくなかった。…人見知り  
だし、卑屈だし、その上、我が儘だし…私なんか、後宮で上手  
くやっていける筈ないって。」

「……………」

私は否定も肯定もせずに、黙って聞いていた。

ホノカ様は、ご自分の悪いところもちゃんと把握している。…ただ、そんなに酷いものではないのですけどね。臆病なところも少し我が儘なところも、まとめて彼女の魅力だと思います。……卑屈な部分ですが、私なんて、思っっちゃうんでしようが。

「……本当は、嫌だつて言いたかった。……でも、お父様が嬉しそうだったから。」

「…お父様、ですか？」

私の問いに、ホノカ様は小さく頷く。俯いていた顔が、くしゃりと歪んだ。

「『陛下に見初められるなんて、流石私の自慢の娘だ。』って嬉しそうに笑うの。…曖昧に笑う事しか、私出来なかった………陛下にお会いした事なんて、一度も無かったのに。」

「……ホノカ様。」

「陛下は即位するにあたり、適当に側室を見繕っただけ。家柄、父の役職、家族構成を鑑みて、たまたま該当したのが私。…たぶん父も私も野心が無く、御しやすいと判断されたんでしょうね。」

確かに殆どの側室が、政治的理由で此処に居るのだらう。私もそう。この前届いた文によると、父（仮）は工部侍郎こうぶじろうに昇進したそうです。

「…わたしは、自分の身の程くらい理解してる。さして美人じゃないし、特技もこれといって無いわ。…でも、だからこそ、言えなかった。…努力家なお父様を尊敬しているから、『自慢の娘』のままでしたかった。何も誇れる事が無くて、卑屈な娘だって…知られなくなかったの。」

「……お父様が、大好きなんですね。」

「…うん。」

「だから、ルリカ様の事、あんなに怒っていたんですか。」

…それなら、以前見せたルリカ様への憤りも理解出来ます。大好きなお父様を貶されて、簡単には許せないのは当たり前。

ホノカ様は頷いて、唇を噛み締めた。

「……臆病な私だけど、ルリカ様が父を馬鹿にした時は流石に許せなかった。……お父様は、実直で勤勉な事だけが取り柄なのかもしれないけれど……素晴らしい方なの。例え愚直と言われていても、私には……」

「ホノカ様。」

「……？」

遮る様な私の呼び掛けに、ホノカ様は不思議そうに私を見た。

「……私がお茶会で言った事は、ただの慰めではありませんよ。」

「……え？」

ゆっくりと見開かれる瞳を真っ直ぐ見て、私は言葉を続ける。

「安璃州は、ただの辺境の地ではありません。戦の多いこの国で、隣国と隣り合った州というのは、かなり重要な拠点だと思うのです。……ましてや輸出入が盛んとなり、これから栄えて行くであろう州です。……無駄な人員を送る隙なんてこれっぽっちも無いと思います。」

これっぽっちと言いながら、くっ付けた人差し指と親指をホノカ様の眼前に突き出した。

実際、微塵も無いと思われます。

首都へのパイプ的、交通路の開拓、整備。

税関等の管理、密輸入の取り締まり。

またそれ等に付随する仕事の組織化、ルールの取り決めエトセトラ……。

防衛関係も考慮するならば、仕事は溢れる程ある。行くべき人材は、即戦力になる人でなければお話にならないだろう。ましてや、トップをすぐ下で支えなければならぬポジションなら尚更だ。

実直で勤勉なだけでなく、ホノカ様のお父様は、たぶんとても優秀な方。

吏部尚書であるルリカ様のお父様は、もしかしたら左遷だと思っているのかもしれない。ルリカ様が馬鹿にする位ですからね……。でも皇帝陛下は、そうは思っていない気がする。寧ろ、信頼しているからこそ、ホノカ様のお父様を派遣したんじゃないかな。

「山積みな仕事をこなし、上を支えながら、下の人間を気遣える人

「じゃなきゃ、今の安璃州の州牧補佐なんて勤まらないと思います。」

中間管理職ってのは、何処の国でも大変そうですね…。

うちの父も部下の方を家に呼んで、お酒飲みながら愚痴聞いたり、上司の接待だと日曜日に朝早くからゴルフ行ったりしてましたよ。

「でもお父様は、…努力家ではあるけれど、天才ではないわ。」

「中間管理職の方に、天賦の才は必要無いと私は思いますよ。」

寧ろ邪魔だと思います。ぶっちゃけ。

天才は、良くも悪くも浮く。上司には嫉妬され、部下には敬遠され、では組織を纏める事は出来ない。

必要なのはきつと、勤勉な秀才。

「ホノカ様のお父様が適任だと、陛下が判断したからこそその異動だと思えます。…そして、そんな信頼に足る方の娘さんだからこそ、陛下はホノカ様を側室に、と望まれたんじゃないでしょうか。」

「……………」

ホノカ様は、呆然とした顔のまま虚空を見つめていた。その表情はだんだんと変化し、生気を帯びて行く。

「…お父様は、いらぬ方では無い、のね。」

「はい。」

「じゃあ私は、胸を張って、お父様を尊敬しているんだって…言ってもいいのね。」

「はい。」

「……………」

ゆっくり、噛み締める様に呟かれたホノカ様の言葉に、私はしっかりと頷いた。

私の言った言葉は、証拠があるものではない。言い切ってしまう事は、無責任とも言える。

でも、どうかお父様を、…そしてお父様を尊敬する自分を恥じないで欲しい。

私もお父さん、大好きです。尊敬してます。

お母さんも、大、大、大好き。

会えない今では、声に出したら泣いてしまいそうだから、我慢するけれど、いつか会えたら抱き付いて愛してます！って叫ぶつもりで

す。

お父さんは照れて、お母さんは鬱陶しがるでしょうね。でも止めて  
なんかあげません。

だからホノカ様も、俯いてしまわないで。

「怒っても、いいのよね？」

「はい。」

ホノカ様は、シーツを握り締めながら、顔を勢いよく上げた。

「……………じゃあ、怒る。」

「……………は？」

ポツリと呟かれた言葉を、私は思わず聞き返した。

え、聞き間違い？

我が耳を疑ってみたけれど、妙な方向にテンションが振り切れてし

まったホノカ様は、言葉を撤回するどころか、高らかに宣言した。

「今から怒りに行く！」

「……………ええっ!？」

…マジですか!!？

側室(仮)の驚愕。(前書き)

明けましておめでとうございます。本年も、宜しくお願い致します。

## 側室（仮）の驚愕。

…どろりしてこぼれた。

私は長い時間息をつき、胸中でそう呟いた。

あれから色々な攻防戦がありました。結論だけ言いますと…止められませんでした。

寝ても、妥協案を提示しても無駄。頑として首を縦には振りません。

ホノカ様の性格について、もう一つ追記するならば『頑固』ですね…。

臆病で後ろ向きな部分は、現在遠い彼方です。

多分睡眠不足で思考能力が低下してる上に、ハイになっちゃってるんでしょうね。アドレナリンでも分泌されてるんでしょうか。

でも、あくまで高潮しているのは精神だけ。食事と睡眠も満足にとっていなかった体はフラフラ。

そんな子を一人で放っておく訳にはいけません。護衛の方も困惑  
気味でしたし…。

…私が焚き付けてしまったも同然ですし、腹をくくりまます。万が一  
の時は、私も一緒に責任を負いましょう。

…サラサのお父様、ごめんなさい。余波が其方へ行かない様頑張り  
ます。

覚悟を決めた私は、まずホノカ様の侍女とカンナに、彼女の身支度  
をお願いした。

顔色の悪さと目元の隈、あと乱れた髪をなんとかしていただかない  
と。

そんな心配を試みたが、侍女二人の手腕は見事だった。

隈や顔色の悪さを、完璧に隠しつつも不自然では無い絶妙なメイク  
や、清楚な白を基調とした衣装に、鮮やかな翠の帯の組み合わせが、  
寧ろ、その細さや色白さを魅力に変えている。

触れれば消えてしまいそうな、儂げな風情の美女の出来上がりだ。

…まあ、中身は我が儘盛りのお子様ですが。

「…ああ、ほら、ホノカ様。足元気を付けて下さい。」

「うん。」

綺麗なお姉さんの手を引きながら、私は小さな子供に話し掛けるように、注意を促す。私の手をしっかりと握りながら、ホノカ様は素直に頷いた。

……私、女子高生だった筈なのに……なんで母ポジションになっているんでしょう。こんな大きい娘を産んだ覚えは無いのに。

でも危なっかしいんですよ！足元がふらついているんです。一人で歩かせていたら、壁にぶつかりそうで怖い。

もういいです……何処までもお付き合いますよという、ヤケとも諦めとも言える境地になってきた。

カナナは心配していましたが、そろそろ戻って来そうなイオリへの伝言を頼んで、私とホノカ様という不安な二人組は、後をついてきて下さる護衛の方を連れ、ルリカ様のお部屋を目指した。

「……………?」

ホノカ様にあわせ、ゆっくりと回廊を進んでいた私は、ふと顔をあげた時、目の端に何かを捉える。

「……！」

その正体を認識した瞬間、私は建物の影にホノカ様を引つ張り込む様にして隠れた。身構えた護衛の方にも、手招きして物陰に隠れてもらう。

「…な、何っ？」

「しー！！」

状況が分からず戸惑うホノカ様に顔を寄せ人差し指をたてた私は、潜めた声で沈黙を強制する。

のまれる形で頷いたホノカ様に、一先ず安心し、こっそりと壁の向こうを窺うと、其処に居たのは…ルリカ様でした。

お部屋に閉じこもっていると思われたルリカ様は、護衛と侍女を従え、何処かへ向かう途中の様です。

「…何で隠れるの。」

ホノカ様は、私の袖を引つ張りながら、無然と呟く。  
目当ての人物を前にして隠れる事を不服に思いつつも、ちゃんと声を潜めている所が可愛いと思う。

「だってホノカ様、ちゃんと言いたい事、纏められているんですか？」

「……………大丈夫よ。」

心の準備も無いまま対面しても、言いたい事の半分も言えないと思います…それに、ホノカ様が突発的な事態に強いとは思えないのですが。

でも、負けず嫌いな部分が刺激されたいらしいホノカ様は、唇をへの字に引き結び、数秒間を置いてそう答えた。

…全く説得力が無いです。

「…では試しにどうぞ。」

「えっ…えと、…ルリカ様の陰険！意地悪！お父様を馬鹿にしにやいでー！」

「はい却下。」

もう、良く考えて下さいとかいう問題じゃない。噛みましたよこの子！…一番大事な部分で噛んじゃいましたよ！

.

「い、今は突然だから、ちょっと舌が回らなかったただけって言うか、

」

「…はいはい。じゃあ深呼吸でもしましょうね。」

だから、落ち着いてからにしましょうって言っているのに。

私の呆れを含んだ視線を受け、ホノカ様は早口でそう捲し立てた。恥ずかしいのか、頬が薄紅色に染まっている。

無然としつつも、しっかりと深呼吸しているのが可愛い。…ツボるなあ、ホノカ様の行動。

シャロン様のような、正統派の、誰もが同意する可愛さでは無い。お馬鹿な子ほど可愛い…という心境に近いです。

すーはーすーはーと深呼吸を繰り返すホノカ様を、生暖かい目で見てから、私は物陰からルリカ様の様子を窺った。

「……………ん？」

何処行くんでしょうかね…とさえつつもルリカ様一行の動向を見守っていた私は、ふとある事に気付いた。思わず小さな声が洩れる。

「…なに？どうしたの？」

ソレを拾ったホノカ様は、深呼吸をやめ、私の方ににじり寄った。ひよっこりと、私を真似る様にして、物陰から顔を出す。

好奇心旺盛なお子様のため息をつき、もう少し後ろに下がるよう指示しながらも、私は彼女の問いに答えた。

「…少し気になったのですが…確かルリカ様の護衛は二人ではありませんでしたっけ？」

「…そう…だったかしら？覚えていないわ。」

私の疑問に、ホノカ様は考え込む様に視線を彷徨させた。そして暫く沈黙した後、困った様に眉を下げる。

…ホノカ様は、引きこもる前も、自分の事で精一杯でしたでしょうからね。

周りを見渡す余裕は無かったから、そんな事まで覚えていないのでしょうか。

私は事件に注目していましたから、カンナやイオリから聞いた事がありました。

その時は、賊がルリカ様のお部屋の近くで目撃された為、彼女だけ護衛が二人、と聞いていたのですが…

「…何で三人いるの。」

今、ルリカ様を守る様に辺りを警戒している護衛は、三人いる。どゆこと。

「…二度目の事件を受けて、増員されたのかしら…？」

今回も、ルリカ様のお部屋近くで賊が目撃された。

ルリカ様の護衛が増えていても、何ら不思議な事では無いけれど…、

イオリもカンナも、そんな事言っていないませんでした。

そこまで報告する義務は無いと思われるかもしれませんが、イオリは仕事に関して、とても真面目で細やかですし、カンナは私が事件の事を気にしていると知っている為、何か動きがあったらその都度教えてくれます。

「…しかも、何で鎧が違うのかしら。」

三人の護衛の内、一人だけ鎧が違う。  
同じ任務についているにも関わらず、何故？

「……………私兵じゃない？」

私の呟いた言葉を拾ったホノカ様が、ぽつり、と呟く。

「…私兵？」

聞き慣れない言葉に、問い返す私に、ホノカ様は小さく頷く。

「エイリ家で元々雇っていた兵士が、若しくはルリカ様の為に、吏部尚書が新たに雇ったんじゃないかな？」

「……………。」

成る程。

つまり、近衛軍の様な公の機関に属さず、個人的に雇った兵士の事ですね。

「それで鎧が違うのね……………じゃなくて！……………いいんですかソレ。」

許可が出るとは思えないんですが。

そんな事を一件許せば、他のお嬢様方のご家族も、『ならウチの子にも！』ってなるかもしれませぬし。

そしてそれら全てを許可してしまえば、規則や取り締まりもだんだんと緩くなり、結果、賊を正面玄関から招き入れてしまう事態になりかねない。

…それとも、今回は特別措置として許可がおりた？

「…分からない、けれど……もしかしたら、吏部尚書が陛下の許可も得ずに勝手をしているのかもしれないわ。」

「……………」

それがもし本当なら……なんて、頭の痛い話でしょう。

…大事になる前に、イオリに相談するべきでしょうか。

最早問題は、私達、側室同士の小競り合いにおさまる話では無い。後宮に、主人の許可無く外部の人間を入れるなんて、簡単に許される事じゃないでしょう。

吏部尚書という地位があれば、色んな方面に顔がきくでしょうし、ある程度の我が儘なら押し通せてしまえるんでしょうが、これは流石に…。

兵部も、皇帝陛下の許可無しに、そんな勝手許さないでしょうし。

「……………」

…うん。

此処で悶々と考えていても、埒があきません。一旦退却しましょう。

私の早とちりなのだしたら、それにこした事は無いし。抱え込む前に、聞く事が正解なのだ、たぶん。

「……、」

ホノカ様、一度帰りましょう。

そう、提案するつもりでした。

ですが、私が小声でそう告げる直前、

「……其処にいるのは誰だ!!」

「……っ、」

壁の向こうから、鋭い声がした。

……しくじりました。

己の思考に捕われている間に、大分距離が近付いていた事に気付かなかった。

神経を研ぎ澄まし、周りを警戒している兵士が、気配を隠している訳でもない小娘を見過ごす筈なのに。…もっと早く、立ち去るべきでした。

「……………」

己の腑甲斐なさに齒噛みしつつも、私は立ち上がる。

私の護衛の方を一瞥し、無言のまま、ホノカ様を逃がすよう目で訴えた。

一瞬躊躇うが、すぐに頷いた護衛武官に手を引かれる形でホノカ様は立ち上がる。

泣きそうな顔で、私に手を伸ばす彼女を安心させる為、ヘラリと緊張感の無い笑顔を浮かべた。

何勝手に、私のフラグたてているんですか。大袈裟ですよ。

『大丈夫』

唇の動きだけでそう伝え……伝わったかな。相手がホノカ様だからイマイチ不安ですが。

二人を追い払った私は、物陰から出て、彼らの前に立つ。

「……っ、」

現れた私を見て、近衛軍の鎧を身に纏った二人の武官は、瞠目する。中央に立つ美少女は、彼らよりも一拍遅れて、驚愕を顔に張り付けた。

長い髪は、ホノカ様の柔らかな赤毛とは違い、炎を紡いだ様な鮮烈な紅。

同色の吊り上がり気味の瞳は、私を見て際限まで見開かれている。純粹な驚きだけだった表情に、だんだんと黒いものが混ざって行く。憎しみと苛立ちと嫌悪と……色んな負の感情が視線に籠められ、私に突き刺さった。

「……トウマ、様。」

呟いたのは、憎々しげに睨み付けるルリカ様では無く、戸惑う武官だった。

何故貴方が此処に？

視線が雄弁にそう語る。

「何故、トウマ様が…」

「…丁度良いわ。」

そして視線だけでなく、言葉に出そうとした武官の声は、ルリカ様に遮られた。

彼女は私を見て、紅に塗られた唇を、笑みの形に歪める。口角は吊り上がっているが…目は全く笑っていない。

「…貴方に、お話があるの。私と一緒に来て下さる？」

「……………」

嫌だ。行きたくありません。

嫌な予感しかしないもの。

そう心の中で反抗してみるものの、実際は口に出せない。だって今、圧倒的に立場が弱いんですよ。

なんせ…

「…隠れていらした理由も、お聞きしたいですし。」

そう。

こっそそ隠れて様子を窺っていた身としては…中々強くは言えないわけ。

……なんか、今更ですが、身の危険を感じます。勿論女の子としての、なんて色っぽい話で無く。

立ってはいけないフラグが、たった気がした。

**護衛武官の緊迫。(前書き)**

再び、サラサ付きの護衛武官、イオリ・ユウキ視点です。

## 護衛武官の緊迫。

「……………?」

陛下と兄への報告を終え、早足で後宮へと戻った私が、中へ入る為の手続きをしている時だった。

見覚えのある少女が、此方へと駆け寄って来たのは。

「ユウキ様!」

「クダン殿……………?」

緩やかに波打つ栗色の髪をなびかせながら、小走りで私の元まで来たのは、小柄な美少女、カナナ・クダン。  
サラサ・トウマ様付きの侍女だ。

慌てたような彼女の様子に、私は嫌な予感を覚える。  
普段の彼女は、貴族に仕えるに相応しい立ち振舞いで、実年齢よりも落ち着いて見える程だ。

そんな彼女の焦りに、何かがあった事を悟り、私は検査の為に外していた鎧と剣を手早く装備した。

「もう通ってもいいな？」

「どござー！」

門番に確認をとり、敬礼と共に威勢の良い返答をもらうと、私はクダン殿に駆け寄る。

「どうされた？」

「……サラサ様が、」

「っ……！ サラサ様がどうした!？」

声を荒げた私に、彼女は厳しい表情になる。

「……まだ何かあった訳では無いのですが、」

そう前置きをして、彼女は簡潔に、だが分かりやすく事態を説明してくれた。

私は話を聞いて、唇を噛み締める。

まさか、私が離れている間に、そんな事になっていようとは……!!

他者を気遣い、人の為に動けるのはサラサ様の美点だ。行動力があり、思い立ったらじっとしていられない気質も、私は好ましいと思う。

……だが、これは軽率だろう!!  
例え緊急性を感じたのだとしても、私を待つべきだった。

他人の事を気にする様に、己の身も案じて欲しい。あの方は、ご自分の価値を……どれ程重要な存在かを分かっているのだ……!!

「おいつ！将軍に伝令を頼む!!」

門番を呼び付け手短に伝言を伝えると、私の勢いに何かを察した武官は、短く頷くと放たれた矢の如く飛び出して行った。

その姿を見送る事無く、私はクダン殿を振り返る。

「行きましょう!!」

「はいつ!!」

私はクダン殿の足を考慮する事無く、全力で走っているが、彼女は離されながらもよくついてきている。

ホノカ・メイ八様の部屋前を通り、エイリ家令嬢の部屋を目指す。

「…っ、」

角を曲がろうとした私は、突っ込んでくる何かに気付き、身を躲した。

「きゃっ、」

「っ!？」

私が避けた事で体制を崩した人を、私は咄嗟に手を伸ばして受けとめる。

「何奴!？」

その直後、怒声と共に喉元に剣が突き付けられた。

「……………」

「っ、失礼致しましたっ！」

冷めた視線を向ける私を見て、そいつは、焦りながら剣を引く。…  
その武官は、私の代理としてサラサ様に付けていた者だった。

何故、お前がいる……………！？

お前とクダン殿が此処にいるという事は、サラサ様には誰がついて  
いるというんだ！！

「……………貴方は、」

腕の中の存在が身動き、顔を上げる。

細身の美女…ホノカ・メイ八様は私を必死な面持ちで見上げ、縋る  
様に腕を掴んだ。

「……………貴方、サラサの護衛の方よね！ ……？お願いっ、サラサが！！」

「……………、」

メイ八様の悲痛な叫びを聞きながら、私は指先から冷えていく様な  
心地を味わう。

彼女を武官に預け、私は全力で駆けた。

……ルリカ・エイリ嬢。

どうか、その方に触れるな。

その方は、皇帝陛下にとって……ひいてはこの国にとって重要な方。

万が一、あの方に何かあれば、

サラサ様に傷を付けるといふ事は、そのまま御身を滅ぼす事になり  
得ると、身を以て知って頂く事になる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6841y/>

---

目指す地位は縁の下。

2012年1月4日01時09分発行